

郷土ちがさき



夏 茅ヶ崎の海
柳島の海岸から

第161号

発行 令和6年9月1日
 発行者 茅ヶ崎郷土会
 会長 平野文明
 編集責任 平野文明

大岡忠相と大岡家もう一人の大名…………… 加藤幹雄 ……
 越前守忠相ノート四 越前守の業績…………… 石黒進 ……
 利他の思想の庚申塔 ……………… 平野文明 ……
 風(自由投稿欄)・川村美子 ……………… 藤間克子 ……
 ・名取龍彦 ……………… 前田照勝 ……………… 長谷川由美 ……

34 23

14 9 2

34

23

運動能力ゼロ、その上に年齢を重ねているので運転は控えるようにしています。通り慣れた道しか使わず、他の人に「どうぞお乗りを」とも言わず、他の人から「乗ったら」と誘われたら丁寧に辞退します。そんな私が、どうしたことか高速道路を走っていました。ふるさと熊本を目指しているようなのです。道路は見えています但りは薄暗く、窓の外の風景はボンヤリです。

茅ヶ崎を出ると優に一千キを超える距離です。かつて二回往復したことがあります。一回目は何が何でもひたすら一直線に、退職後の二回目は途中を泊まりながら。

今回は三度目。先を走る車に追いつきました。軍用車です。ゆっくり走っています。追い越し車線で抜きました。しばらく走るとまた同じような車。また抜きました。しかしまた同様の車です。登りの坂道にかかって分かったのですが、一列縦隊の数え切れない軍用車です。

あれっ。この高速には反対車線がない。走っているのはこれらの車と私だけ。同じ方向に。ジープやトラック、タイヤがなかったり、エンジンから火を吹いたり、メチャメチャに壊れていたり。オット、気づきました。今、世界各地で起きている戦争で壊れた車じゃないかとゆるやかに大空を目指して昇っている。エッ！とすると自分は…

夏はホラー

(茅ヶ崎郷土会々々長 平野文明)

大岡越前守忠相と大岡家のもう一人の大名

加藤幹雄

一 はじめに

昨年の六月、大岡越前守忠相（おおおかえちぜんのかみただすけ）の墓石を東京谷中にある瑞輪寺（ずいりんじ）で捜し、「越前大岡家墓所」および大岡忠厚家について「郷土ちがさき第一五八号」に報告させて頂きましたが大岡忠厚家の他、もう一つ、是非確認したい大岡一族がありました。

越前守忠相が寺社奉行で一万石の大名になったことは、大変有名ですが大岡家第三代大岡忠吉（おおおかただよし）を先祖に持つ、越前守忠相と、もう一人、大岡家で大名になった旗本がいます。その人物は**大岡出雲守忠光**（おおおかいずものかみただみつ）といい、三百石の旗本から一代で二万石の城持ち大名にまで出世した人物です。

一昨年浜之郷村の領主大岡家の家系を『寛政重修諸家譜』で調べていく内にこの人物を知り、大いに興味を持ちました。大岡忠光については、NHKテレビドラマ「大奥」などでご存知の方も多いと思いますが筆者にとつては新たな発見でした。チャンスがあれば、忠光とその家系、居城を追いかけて見たいと思っただけでしたが今年（令和六年）七月上旬、上手く時間が取れ、朝早くから、忠光の居城のあった埼玉県さいたま市岩槻（いわつき）区を訪れました。訪れた日は平日で猛暑日とあって、東武野田線岩槻駅前は閑散としていました。まずは駅にある観光案内所で岩槻関

連ガイド資料を入手し、「さいたま市立岩槻郷土資料館」「岩槻城址公園」「龍門寺」などを訪ねましたので、本号と次号で、今回の岩槻巡りと忠光を中心に報告したいと思います。

二 もう一人の大名 大岡出雲守忠光

異例の出世を遂げた忠光は宝永六年（一七〇九）大岡忠利の長男として生まれ、享保七年（一七二二）十三歳で有徳院（八代将軍徳川吉志 拜謁。十四歳で長福丸（ながとみまる）九代将軍徳川家重の幼名）の小姓になります。病弱で言葉の不明瞭な家重の言葉を理解できる唯一の人物として、家重の幼少から將軍に昇りつめ、引退するまでの間、家重の口の代わりとして勤めました。徳川幕府の公式記録である『徳川實紀』にこのあたりの事が記載されています。引用が少し長くなりますが忠光の業績がこれほど詳しく記載されていることは、如何に忠光が徳川家（家重）に尽くしたかが分かります。

あとに掲げる『徳川實紀』に書かれていることを簡単に要約しますと、前半は忠光が「三百石の稟米を得て家重の小姓となり、加増を重ねて二万石の大名となり、岩槻藩の藩主になり、五十二歳で病没するまで」と、

後半は「多病で言葉が不自由であった家重の口の代わりに徹して務め、要職についた後も権力を濫用しない、誤解を招かないよう自らや家族・家臣に対して厳しく律したこと」がエピソードを交えて書かれており、忠光の生き様が良く分かります。

一方、大岡家が作成提出し、幕府で編纂された『寛政重修諸家譜巻第六十三藤原支流大岡』に忠光の生い立ちや業績、また領地の変遷、墓所などが詳しく記載されていますが、家重の事は小姓になった時の事のみしか書かれていません。『徳川實紀』と『寛政重修諸家譜』の両書と比較して見るとその違いが良く分かります。幕府側で作成した『徳川實紀』の方が忠光と家重との関わりや忠光の人となり書かれており、興味深いものがあります。文中の句読点は原文のまま。「()」は筆者の追記。

『徳川実紀』後明院殿(徳川家重)御實紀 巻一

宝暦十年(一七六〇)六月十四日 に書かれた大岡忠光

けふ武蔵野国岩槻城主大岡出雲守忠光が所領二万石。其子兵庫頭忠喜(忠光の長男)に襲しむ。此忠光は。大番の士助七郎忠利が子にて。はじめは主膳または兵庫といふ。享保七年(一七二二)八月廿八日初見の禮をとり。九年(一七二四)八月廿六日西城の小姓となり。粟米三百俵をたまふ。十二年(一七二七)十二月十八日従五位下に叙し出雲守と稱し。十八年(一七三三)十一月十五日祿加へられ八百石となり。小姓の首座たらしむ。元文二年(一七三七)十二月十二日小姓の頭取となり。四年(一七三九)五月廿八日かりに申次のことを奉はり。延享二年(一七四五)本城にうつらせ給ふ時供奉して。九月朔日小姓組の番頭に准ぜられ。三年(一七四六)十月廿

五日御側にすすみ。采地加へられ。二千石となり申次となる。寛延元年(一七四八)十一月十五日三千石を加へられ。宝暦元年(一七五二)十二月七日さらに加恩ありて。万石の列に入る。四年(一七五四)二月朔日少老(若年寄)の職に補して。奥に候する事故の如し。所領の地加へ増して一万五千石となる。六年(一七五〇)五月廿一日御側用人にのぼり。従四位下に叙し。重ねて益封(えきほう 加封)して二万石となり。武蔵国岩槻の城主となる。ことし(宝暦十年・一七六〇)四月二十六日病て死す。年五十二。忠光大番士の家(ママ)より出で。一時にかく頭要(けんよう…高い地位と重要)の職に登り。剩へ(あまつさへ)所領あまた加へられし事。是しかしながらその性質聡慧の人に超過せる所ありしによる所なり。かつ温恭にして権勢をさしはさまず。よく人にへり下りしかば。人も又にくみうらまず。されど吝嗇の失ありければ。忠光申行ひしことには其弊も亦少なからず。是をもて世にそしりを負事も頗る多かりしとぞ。(日記、藩翰譜続編、家譜)(上の括弧書き原文のママ) 忠光が聡慧の人に卓越せしといふ事あまたあるがなかにも。惇信院殿(家重)には御多病にて。御言葉さはやかならざりし故。近侍の臣といへども。ききとり奉ることかたし。あるとき放鷹(ほうよう 鷹狩)の御遊ありて。城門を出給ふほど。小姓の頭取某をめて。何事をか仰られしが。某きき取ることあたはず。ふたたび御けしきありしが。さらに聞わからず。よて某いそぎ御殿にかへり。忠光に。ただ今かかる御ことあり。いかにはからひ候べきと申ければ。忠光しばし空を打ながめ。風寒し。御羽織奉れともうしけるに。其人かしこまり候とて。直に御羽織をもち参りて奉りけ

れば。はたして御けしきにかなひけるとなり。忠光何事につけても。公の御旨を迎へさぐり得て。はからふ事共みなこの類ひなり。又忠光時めける身となりし後。御かへりみはさらにもいはず。衆人の追従一かたならざれば。一家の奢侈(しやし) ぜいたく) 人目を驚かす計りなるべしと人々思ひしに。さはなく。屋室。衣服。飲食。器用もはら省略のみ多かり。忠光いまだ一万石の祿たりしとき。其弟徳三郎といへるが。近き邊の神祠に詣しかへるさに。一星金(意味不明) をもて金魚買て歸り。翫びたりしと聞て。忠光けしきよからず。一星金はわづかなる事といへ共。幼年より遊玩のために財を費すことをならふは。いとひがごと(僻事 まちがい) なりとて。徳三郎を一日塗籠(ぬりこめ 四方壁の納戸) におしこめてをきしとぞ。此徳三郎後に竹本次左衛門長宥にやしなはれて。次左衛門長景と申ける人なり。忠光がふるまひ是等によりて見れば。今の世の人には勝れたることもありと知べし。(文献①)

『寛政重修諸家譜』に書かれた大岡忠光

(一) は原文の注釈。

(二) は筆者注記。

大岡忠光(おおおかただみつ)

兵庫 主膳 出雲守 従五位下 従四位下 母は上に同じ

(天野兵八郎重貞の養女。)

寶永六年(一七〇九) 生る。享保七年(一七二二) 八月二十八日 じめて有徳院殿(吉宗) に拜謁す。時に十四歳九年(一七二四) 八月二十六日 惇信院殿(家重) の御小姓となりて二丸(二の丸) に勤仕し、十年(一七二五) 六月十九日より西城(西

の丸) のつとめとなり、稟米(りんまい) 扶持米 三百俵をたまひ、十二年(一七二七) 十二月十八日 従五位下 出雲守(いずものかみ) に叙任す。十八年(一七三三) 十一月十五日 五百石の加増あり。この日 さきに賜ふ稟米を采地(さいち) (領地) にあらためられ、武藏國足立、埼玉、比企三郡のうちにをいてすべて八百石をたまふ。元文四年(一七三九) 五月二十八日 諸事執啓(しつがい) 意見書などを取次奉(す) 上(す) する(こと) を見習ふべきむね仰(おほ) をかうぶり(冠ぶり) 位階(い) をもら(う) う、延享二年(一七四五) 九月朔日 御小姓組の番頭(ばんがしら) に准(じゆん) (待遇・資格) ぜらる。三年(一七四六) 十月二十五日 御側(おそば) 御側衆(み) にすすみ、相模國足柄、大住、山城國相樂三郡のうちにして千二百石を加へたまひ、諸事を執啓す。寛延元年(一七四八) 十一月十五日 常陸國新治郡(にいはりぐん) のうちにをいて三千石の加恩あり。寶曆元年(一七五二) 十二月七日 五千石を加へられ、このとき常陸國新治郡のうち二千七百石餘の地を割て上總國夷隅(いすみ)、市原、安房國長狭(ながさ)、朝夷(あさい) 四郡のうちにつされ、すべて一萬石を領す。三年(一七五三) 六月十五日 日光山御宮修造の事をうけたまはり、時服五領をたまふ。四年(一七五四) 三月朔日 若年寄に轉じ、直月をゆるされ、なを奥の事もかぬ(兼ねる)。この日 安房國安房、長狭、上總國埴生(はぶ) 三郡のうちにをいて五千石を加賜せらる。十二月 二日 五十宮(いそのみや) とも、皇族(みま) 家治(けい) の正室(せいしつ) 御入輿(ごにり) の事を沙汰せしにより、八丈織五端(はちぢょう) をたまふ。六年(一七五六) 五月二十一日 御側御用人となり、従四位下に昇る。この日 武藏國埼玉郡のうちにをいて五千石の加恩あり。すべて二萬石を領し、さきにたまふ足柄

岩槻藩 大岡家歴代藩主 (ウィキペディア・寛政重修諸家より抜粋してまとめた)								
歴代	藩主名		官職銘	幕府役職	石高	生(上段)・没年(下段)	墓所	その他
初代	大岡忠光	ただみつ	出雲守	若年寄 側用人	2万石	宝永6年(1709) 宝暦10年(1760)	龍門寺	
2代	大岡忠喜	ただよし	兵庫頭	奏者番	2万石	元文3年(1738) 文化3年(1806)	湖雪寺	
3代	大岡忠要	ただとし	式部少輔	奏者番	2万石	明和3年(1766) 天明6年(1786)	湖雪寺	
4代	大岡忠烈	ただやす	丹後守	—	2万石	明和4年(1767) 弘化元年(1844)	湖雪寺	大岡忠喜 二男
5代	大岡忠正	ただまさ	主膳正	—	2万石	天明元年(1781) 文化13年(1816)	湖雪寺	加納久周 三男
6代	大岡忠固	ただかた	主膳正	奏者番 若年寄	2万3千石	寛政5年(1793) 嘉永5年(1852)	湖雪寺	加納久周 五男
7代	大岡忠恕	ただゆき	兵庫頭	—	2万3千石	文政5年(1822) 明治13年(1880)	湖雪寺	
8代	大岡忠貴	ただつら	主膳正	—	2万3千石	弘化4年(1847) 大正9年(1920)	龍門寺	藩知事

大住、安房、埴生四郡をよび長狭郡のうちを割て埼玉郡のうち
ちとうつされ、岩槻城をたまふ。七月二十七日千代(家治女
姫君生誕の事を沙汰せしにより、時服七領をかつげらる(被
け物・かずけもの 引き出物として与えられる)。のち病にかかる
のとき、近侍の士をもつてとは(問わ)せたまふ。十年(二七
六〇)四月二十六日卒す。義山天忠得詳院と號す。岩槻の龍
門寺に葬る。室は大井新右衛門政長が女。(文献②)

三 大岡家岩槻歴代藩主について

前記の『徳川實紀』には書かれていませんが忠光は岩槻藩に入
封する前、宝暦元年(二七五二)に上総国勝浦城(現千葉県勝浦市)
一万石の大名となつています。その後に加増され二万石で岩槻城
に入封しました。以後、大岡家は転封(てんぼう)することもな
く、八代まで百十五年間の長い間、岩槻藩主をつとめ、明治維新
を迎えます。その百十五年間の藩主一覧を示します。一覧表を見
ますと忠光以降、減封されることなく、六代大岡忠固(ただかた
は若年寄になり、三千石の加増を受け、そのまま八代まで二万三
千石で幕末を迎えます。各代の藩主は大きな瑕疵もなく、藩主を
務めたようです。途中、加納久周(かのうひさのり)の子供を養子
に向かえて藩主にしていますが久周は大岡忠喜(ただよし)の子
供で、大岡家から加納家へ入った養子です。忠光の血統から後代
の藩主を迎えたことが分かります。

四 龍門寺(大岡忠光の墓所)

忠光の墓所、龍門寺は岩槻城址の北西約二キロメートルあたり、
日光御成道(渋江通)沿いにあります。龍門寺は『新編武蔵風土

記稿』卷之二百 埼玉郡之二 澁江(しづえ) 町に次の様に記されています。

禅宗曹洞派、男衾郡(おぶすまぐん) 寄居村正龍寺の末、玉峯山と號す、本尊釋迦を安置す(以下省略)。(文献③)

しかしなぜか忠光の墓所についての記述がありませんので山門前の説明板「龍門寺の文化財」(平成二十八年三月 さいたま市教育委員会)の内容を紹介します。

戦国時代の天文十九年(一五五〇)、小田原北条氏の重臣佐枝若狭守(さえだわかさのかみ)が自らの館内に開創したのが龍門寺です。そのため、境内の西側と北側に残る土塁は佐枝氏の館の名残と言われており、山号の玉峯山もこの若狭守の法号に因みます。江戸時代には、幕府の祖・徳川家康を祀った日光東照宮に将軍が参詣する日光御成道に面するようになり、岩槻藩主大岡忠光の菩提寺としての歴史を刻んできました。龍門寺は土塁と木々に囲まれた大きな境内で本堂には阿弥陀如来の他、忠光の坐像も祭られています。また岩槻藩藩士の墓地にもなっています。

五 大岡忠光墓所

忠光の墓所は龍門寺山門(市の重要文化財)を入れてすぐ左の墓地の通路を南に三〇メートル程入ると突き当り、垣根に囲まれた一角にあります。墓所には立入できませんが墓所の周りは拝観見学通路がつけられています。墓所の中央やや左寄りに瑞垣に囲まれた一段高い位置に火輪が広がった三メートル近くの巨大な五輪塔があり、これが二万石の大名大岡忠光の墓石です。墓所の広さは五〇坪ほどで、瑞垣の外側に八代大岡忠貫(ただつら)の墓石も並

んでいます。また墓所の南隅には自然石の墓誌(墓碑)がありまますすが何が刻銘されているか分かりませんでした。墓所入口の説明板には次のように書かれています。

さいたま市指定史跡

大岡家の墓 指定年

月 昭和三十五年四月
一日

江戸幕府側用人(そ
ばようにん)で、岩槻藩
主大岡出雲守忠光(い
ずものかみただみつ)(一
七六〇年没)の墓です。

扉に大岡家の家紋を配した瑞垣(みずがき)の中、石組の基壇上から空、風、火、水、地を表す巨大な五輪塔を据え、地輪の正面には「得祥院殿義山天忠大居士」、右側面には「武州岩槻城主従四品前雲州太守大岡氏藤原忠光之墓」と刻まれています。他にも明和事件の中心人物となる山縣大弐(やまがただいに)が関係した忠光の墓碑や石灯籠が残されています。

大岡家は三河以来の徳川家の譜代の幕臣で、一族の中から名奉行として知られる大岡越前守忠相を輩出しました。忠光は三〇〇石の旗本の家の生まれでしたが、その才能を



龍門寺の加藤忠光の墓石(筆者撮影)

發揮して、御側衆(おそばしゅう)・御用御取次・若年寄(わかどしより)(奥勤兼帯)、さらに側近として最高職の側用人にまで出世し、第九代將軍徳川家重近く仕えて厚い信任を得、幕府政治を長い間動かしてきました。

宝暦元年(一七五二)には勝浦(千葉県)一萬石の大名となり、その後加増が続き、宝暦六年(一七五六)には二萬石の岩槻藩主となりました。

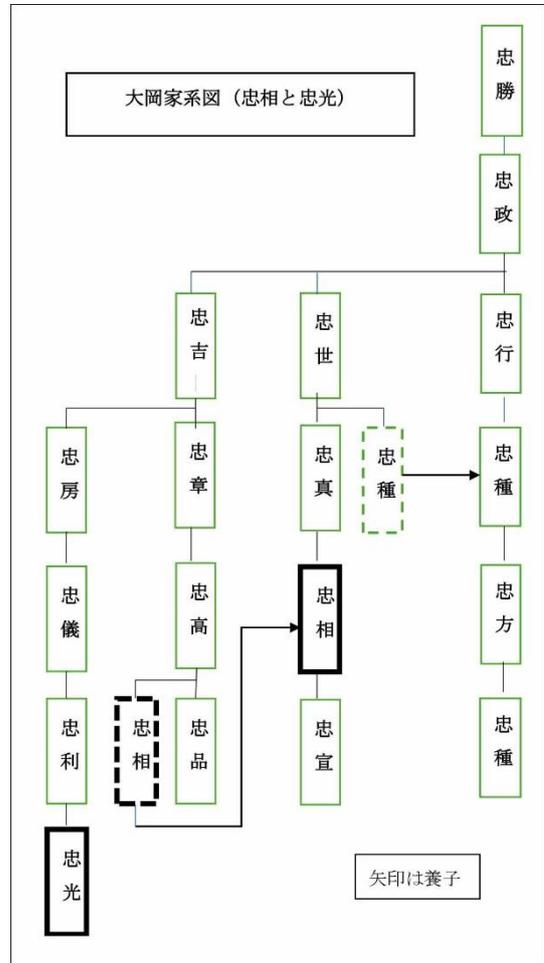
岩槻藩主としての忠光の在任期間は四年間と短く、幕政の中心人物として多忙を極めました。宝暦十年(一七六〇)四月に亡くなり、後の側用人田沼意次ほか幕閣要人や諸大名が関与する中、僧侶五十人余による盛大な葬儀が当山で行われています。

明治維新まで続く岩槻藩主大岡家人代の基礎を作った名君で、幕藩体制の維持に尽力した忠臣でもありました。

平成二十八年三月

さいたま市教育委員会

龍門寺墓地内に忠光・忠貫以外の大岡家の墓石がないか捜してみましたが見当たらず、後日、龍門寺のご住職吉田さんに電話でお尋ねしたところ、龍門寺にある大岡家の藩主の墓石はこの二基だけでその他は全て六本木の湖雲寺(こうんじ)にあるとのことでした。また現代に続く九代目および十代目の墓石は龍門寺にあるそうです。一方、その他藩主の墓所になっている湖雲寺は寺の経営に問題があり、寺の土地は中国資本のホテル用地となり、湖雲寺は消滅の状態との事でした。湖雲寺の大岡家の墓石などは港区役所が管理しており、そこに確認すれば大岡家の墓石について分かるかも知れないとのことでした。



六 大岡忠相と大岡忠光

大岡忠相と大岡忠光の関わりあいを見てみたいと思います。

忠相の生れは延宝八年(一六七七)。一方、忠光は宝永六年(一七〇九)で、年齢差は三十二歳。共通の先祖は忠相の曾祖父、大岡忠吉で、忠光は忠相の「はとこ」の子供にあたります。かなり遠縁で関係性は薄い二人ですが、共に徳川吉宗・家重二代の將軍仕え、腹心の部下として幕府を大きく動かしてきた様子を見ると両者は相互に深い関わりを持って幕臣生活を過ごして来たのではないかと考えています。しかし、両者の関係を示すような資料は『大岡越前守忠相日記』や忠光の残された資料の中からは見つからないようです。忠光は重臣の地位を得たあと、権力を行使することや幕府の重臣達に誤解を与えぬよう生涯注意を傾け、自らを厳しく律していたようです。ましてや主君に関わることを書き物に残すを極力回避したことは忠光にとって当然だったかも知れま

せん。しかし、後世に根岸鎮衛(ねぎしやすもり)江戸町奉行・勘定奉行を務めたがまとめた随筆『耳囊』(耳袋みみぶくろ 文化十一年・一八一四)の「大岡越前守金言之事」の中に忠相が忠光の屋敷を度々訪れたこと、忠光の求めに応じて忠相が話した内容などが出ています。この話は忠光の御側(おそば)向きを務めていた大貫東馬が忠相と忠光の話を聞いて、大貫東馬の上司、根岸鎮衛に語ったとあります。この頃、忠相は七十歳前後、忠光四十歳前後と思われる。そのところを紹介します。(傍線筆者)

越前守忠相は享保の頃出身して御旗本より大名に成り、政庁の其耆人になり。大岡出雲守(忠光)は惇信院様の御小姓を相勤思召に叶ひ、段々昇進して御側に至り、後は二万石まで御加増ありて、御側御用人を勤、岩槻の城主なりし。未(いまだ)御側の頃、同姓のよしみある故、越州(忠相)も折ふし雲州(忠光)の館へも来り給ひしが、雲州或時越州に対し、御身は当時世上にて天下之大才と称し、御用(もち)ひも一かたならず、我も小身より御取立に預り御政事にも携り候儀願はくば心得にも可成(なるべき)事は不借(おしませ)教誡(きょうかい)し給へと念頃(ねんころ)尋ねければ、越州答へて、某(それがし)不才にして何か存寄候(ぞんじよりそうろう)事も無之、御身はとし若にて当時將軍家の思召に叶ひ、知恵といひ無残所(のころとこなき)御事、何(いずれ)か教諭の筋あらん。併(しかしながら)老分の某なれば、聊(いささか)御身の心得にならん事不申(もうさざる)もいかなれ。一事申談(もうしだんじ)候はん、都て(すべて)人に対し候ても世に

対し候ても、万端を合せ候て御取計ひ(おとりはからい)可然(しかるべく)候、しかし、実(誠心誠意)を以合せ給ふ事肝要(しかるべく)候、しかし、雲州も深く信状ありしと、雲州側向(そばむき)を勤めし大貫東馬といへるもの、後次右衛門とて柳營(りゅうえい)幕府に勤仕し、予が支配なりしが、まのあたりにて承りしと語りぬ。(文献④)

この「大岡越前守金言之事」に書かれているように、非公式に忠相と忠光は同族のよしみもあつて幕府運営や徳川家重の家督相続など、多くの課題について意見交換を行っていたのではないかと思つていきます。

【引用文献】

- 文献①改定増補 国史大系第四十七巻『徳川實紀 第十篇』八頁
 ～九頁 | 吉川弘文館 昭和四十一年四月三十日発行
- 文献②『新訂 寛政重修諸家第十六』巻第六十一～千八十
 原支流 大岡 | 株 続群書類従完成会昭和五十六年一月二十
 五日発行
- 文献③大日本地誌体系⑩『新編武蔵風土記稿』第十巻 卷之二百
 埼玉郡之二 岩槻領 九五～一〇一頁 雄山閣 昭和五十六年
 三月五日発行
- 文献④『耳囊』上 根岸鎮衛著 長谷川強校注 岩波文庫
 七七～七八頁 二〇一四年六月十六日第十四刷発行

大岡越前守忠相ノート(その四)

越前守の業績

(I)遠国奉行(本誌一五九号に掲載)

(II)町奉行(同右)

(III)町奉行(評定衆その①)

町奉行大岡越前守忠相に関しては、「大岡裁き」あるいは「大岡政談」と呼ばれる実にかくさんの話が伝わる。しかし、

「大岡政談一四一話、重複を除くと九四話、(中略)そのうち、実際に越前守が担当した事件はただ一件、享保一年、一七二六年の「白子屋お熊」事件だけだ」という。『大岡忠相』大石 学
 そういふ裁判沙汰をめぐる「お話」を取り上げる意味はなさそう
 うだ。

一方、「町奉行」は各都市名を付けた「京都町奉行」や「大坂町奉行」とは違い、これだけで一つの職名であり、これはただ江戸という町の治安維持を担当しているだけの仕事ではない。という
 ことでこれに関する逸話も多く、注目してみたい。

公儀(いわゆる徳川幕府)は、現在の中央政府と同じとみることが
 できる。その組織の中で「町奉行」は「評定所」の一員とされ
 ている(評定衆、評定所一座)。これにより、町奉行には国政に係
 わる多くの任務と権限が与えられていた。

さらに大岡越前守の頃には一時的に「関東地方御用」も担当さ
 せられていた(一七二二年…享保七年)。相当守備範囲は広くなっ
 ている。

石黒 進

こういう民政の分野でも、越前守の業績について多くの話が語
 り継がれている。すでに紹介した江戸町火消しの整備や目安箱、
 そして小石川養生所の話は有名だ。これらは大都市江戸の管理運
 営に関する町奉行本来の仕事とも言える。しかし、中には町奉行
 とはともに関係なさそうな話もある。作り話ではないかと思われ
 るほどだ。例えば、日本で発行された書籍、和書に必ずつけられ
 る「奥付」は、江戸時代に定められた日本独自のものだ。これが
 越前守忠相の仕事だ、という。これは事実である。

町奉行大岡越前守が定めた御触書がある。一七二二年(享保七
 年)十一月、「新作書籍出版之儀に付触書」に「何書物ニよらず、
 此以後新板之物、作者并板元之実名、奥書ニ為致可申候事。」(原
 文のママに引用)と書かれている。

当時横行していた「偽板」(海賊版)に対し、版元の出版権をは
 つきりさせようという意図のもとに出されたのだ。文書管理に対
 する厳しい姿勢がうかがえるが、実はこれはただの「豆知識」で
 終わるような話ではない。広く幕府全体の文書の管理を考えてい
 た越前守が、具体的に打ち出した指示の一つの表れにすぎないら
 しい。その全体をあえてひと言でまとめて言うと「江戸幕府の構
 造改革」になる。実は相当奥が深い「国政に係わる」業績の大き

な話の一部だったのだ。『江戸のエリート経済官僚 大岡越前の構造改革』安藤優一郎著NHK出版および「特別寄稿 幕府公文書と大岡忠相」大石 学著『大岡越前守忠相と豊川』所収 桜ヶ丘ミュージアム

ただし、お話し立てで面白おかしく書かれた訳でもないのに、一つだけ明らかな間違いがある、それは『大名行列』だ。越前守は定府、江戸に定住する大名だったので実際には行われなかった。残念だがまず始めに断っておこう。

そういう越前守が引き受けた幅広い職務の中から、いくつか取り上げてみる。特に地元、茅ヶ崎との関連を話題にしたい。例えば、

(関東)「地方御用掛(じかたごようかかり)」という職を兼務していたことで青木昆陽を取り立てて救荒食としてのさつまいも(甘藷)を普及させた、というような逸話があった。これは茅ヶ崎で今も行われている「大岡越前祭」に影響する。大岡祭が戦後一時期途絶えたのち、復活したときにまず「甘藷祭」という名目が与えられた。その理由がこんなところにあるのではないかと思われる。

そもそも、大正元年(一九二二)、越前守は、業績に対し「従四位」という官位を追贈される。この追贈をきっかけに始まったのが「大岡祭」であった。明治新政府以来、行われた官位追贈は朝廷への貢献に対する顕彰が建前だ。だからそれに関連した業績が述べられるが、川越の大正天皇陛下統監の「陸軍特別大演習」に際して行われた、ということから考えるとこの近辺の「武蔵野新田開発」という業績が念頭にあったはずである。

地方御用の最重要項目である新田開発(特に武蔵野新田)、そしてその経営に大きく貢献したのが、越前守忠相の配下の与力集団

であった。越前守を「御頭 おかしら」とする役人集団の活躍が知られている。その一人、ここで業績を上げたのちに出世して代官となる上坂政形(元禄九年…二六九六年…宝暦九年…一七五八年)は「地方巧者」といわれる「技術官僚、テクノクラート」だった。

また彼は後述する「刑法典編纂」プロジェクトにおいても、その基礎データ作りで活躍している。後述するが、この仕事は、茅ヶ崎にも影響を与えている。それは幕末から明治にかけての「法曹界」との強いつながり、である。

この大岡祭という顕彰事業や菩提寺、浄見寺の震災復興に「法曹界の寄与」が注目される。これは法務官僚としての越前守の業績、「刑法典編纂事業」と関係があるはずだ、と考えている。

ちよつと長いが、沼田頼輔著『大岡越前守』に尾佐竹猛博士が寄せた献辞(同書三頁)を次に引用する。()は筆者の注記。

明治以降、欧米文物の輸入と共に法制裁判の部面に於いても最先に採り容れられ、法典の完備、制度の整正、文物燦然として欧米先進国に譲らざるの概あり、舊物舊制は棄てて顧みられざるの時に當り、ひとり大岡裁判なる用語が司法部内に於いて生命を有したのである。その所謂大岡裁判とは世俗の理想的明裁判(名裁判)といへるのとは稍意味を異にし、仮令(たとえ)法律の条文に反するも社会の実情に適する裁判といふ意であったのである。(中略)今や具体的妥当性といひ、或は信義誠実の原則といふ如き、畢竟この語を正確つけたるに過ぎない用語が、輸入とはいひ、解釈判断の大原則となつたのは東西その揆を一にしたので以て大岡越前守の偉大さを物語るのである。

法曹界では 法文の硬直した解釈、言葉通りの厳格な執行では

なく、「自由心証主義」にも通ずる人情・世相にあわせた判断を「大岡裁き」というらしい。

(IV) 経済官僚 (評定衆 その②)

経済活動の一つとして、「先物取引」という方法が現在も行われている。これが始めて公認されたのが大坂の「堂島米会所」(どうじまこめかいしょ)だ。つまりこれが「世界初の商品先物取引所」だという。しかもそれを決定したのが越前守と伝えられている。

大坂の米会所では諸国から集まる年貢米を取引するために、所有権を「米切手」の形にして、売買されていた。その取引所が淀屋橋から堂島に移って、新しい「堂島米会所」開かれたのが一六九七年。基本は「正米取引」だが、これとは別にあらかじめ約束した価格で売買する「帳合米取引」という方法が始められた。後者は「空米取引」、投機のような形でもあるが、実際には米価格安定に役立つ一面もある。幕府はしばしば、不正取引として禁じていたが一七三二年に制限を設けて許可することにした。現実的な施策である。朱子学という倫理規範が基本の武家社会でよく採用したものだ。その後江戸と大坂の商人の間でひと悶着あり(詳しい経緯はよくわからない)結局この取引は大坂堂島に限って幕府が公認する形で行う、とした。逆に言えば幕府が管理し、責任を持つ、という意味だろう。このお墨付きを与えたのが奉行 大岡越前守、一七三〇年のことと記録されている。すぐれた経済官僚という一面がうかがえる。肩書きは町奉行であるが評定所として幕府が決定した、ということだ。

評定所を構成するのは勘定奉行(四名いるうち、勝手方ではない公

事方を担当する二名)、寺社奉行四〜五名、そして町奉行二名、この三者が中心だった。これを「三奉行」あるいは「評定所一座」とも呼ぶ。これに老中や大目付などが加わり、上げられてきた議題を審議する。対象は裁判案件だけではない。多岐に亘る争いことの仲裁裁定を行う。勘定奉行がその配下を「留役」、つまり常任の事務方を担当させていたが、特に主導権を握っていたというわけでもないようだ。寺社奉行は「格は高いが若手大名の出発点」という位置づけだった、見習い、という言い過ぎか。実質まとめ役は老中、審議実務の中心となつたのは、自分の役所に多くの人財、人員を擁した二人の町奉行だったらしい、こんな役どころ(役回り)だったのではないだろうか。

経済官僚としての大仕事の話がもう一つ残っている。元文・享保の貨幣改鑄に大きな役割を果たしたことだ。これは、「越前守が町奉行から外されたのはこのためだ」という因縁話にもなっている。

逸話ではただ単に、事情聴取に対し両替商がその手代風情を奉行所にさし向けた、これに対し、職権でその手代を牢屋にぶち込んだ、と伝えられる。「なめるんじゃねえ。そしてこのこじれた事態を打開するために、町奉行を外して寺社奉行に格上げさせて手を打ったのだ、と。しかしそんな単純な話ではなかった。難しくすぎて実はよく分からないのだが。

貨幣の価値をどう捉えるか、という難しい問題には簡単に結論は出せない。しかもこの時は、幕府の財政が窮乏しつつあるなかで、その打開策をさぐる過程に現れる問題だった。元文の貨幣改鑄から始まる、新井白石と荻原重秀との対立も絡む。結論については今も意見は分かれるらしい。素人にはよく分からないのだが、

米取引といい、貨幣観といい、越前守は合理的な理解を持つていたように見える。この難問にも自信を持つて立ち向かい、そして混乱収拾に強い意志で対処した。

貨幣改鑄に伴いその質を落とす、それは金・銀の量が足りないからだ、という論理？で將軍吉宗も説得した。この問題はさらに今で言う変動相場制にまで話が広がる、こうなると素人にはもうお手上げだ。ただ、よく言われる「西国の銀遣い」に対しこの「銀本位制」が実は当時の世界標準だった。関東の「金遣い」(金本位制は一九世紀イングランド銀行により始められる)、という二重の規準(ダブル・スタンダード)が障礙となった。この期に両替商が一儲け企んだ、などという話になると、俗な話としては面白いし、誰かを悪人にすれば話が分かりやすくなる。しかし、実は本当の理解とは言い難い事が多い。

ともかく、この政策変更への両替商の非協力が、金銀相場の銀価格を急騰させるという事態を招いた。これに対して強権的指導に出た、というのが最初に記した越前守の「逸話」となって残ったのだった。

せいぜいこんなところまでしか理解が及ばない、これ以上は自信がない。ただ、これもただの「町奉行」ではなく「評定衆」としての仕事だった、ということでもまとめとしておく。曲がり角に立った江戸幕府の「財政問題、経済政策」という大問題に全力で取り組んだエピソードの一つ、とさらに大きく括することもできるだろう。

ちなみに、これは次の世代の田沼意次の大胆な挑戦に引き継がれる。「年貢(農業課税)から(商業課税)への政策変更」という根本的な問題解決を目指す、つまり「国家財政の基盤を農業生産

(米、年貢)におくのではなく、貿易など含めた商業活動に対する課税(運上金・冥加金)に政策的に変換させる」とうことか。とまあこういうのも実はまだ十分理解できていないのだが。

ただ田沼主殿頭(とのものかみ)の試みは不作、飢饉への対応に追われるなど不運が重なり失敗に終わる。このために、田沼意次は大悪人とされてしまう。程度の違いはあるにせよ当時は慣例であった「贈答儀礼」を「賄賂政治」と糾弾されるのだから気の毒だ。標的とした「肥大した商業資本」、つまり豪商、大商人に相当憎まれたのだろう。そしてその結果大商人に対しては最後まで「取り潰し」ぐらいの対応しかできなかった。この幕府の経済的な弱点は結局幕末まで解決できなかった。そうしてみると、そもそも武家政権の「楽市・楽座」という政策がどうだったのか、とまで素人の想像は広がってゆくが、とてもそこまで考える力はない。

越前守の足跡は、幕府のお膝元、「江戸府中」だけでなく、「町奉行・評定衆(地方御用掛)」として関東一円にも及ぶ。もちろん先祖代々の墓所のある相模国高座郡堤村―一族の故地、権現さま(徳川家康)からいただいた領地、下大曲村もその中に含まれる。さらにのちに大名としていただいた先祖の地、三河国岡崎の、宝飯郡(ほいぐん)、額田郡(ぬかたぐん)(陣屋は額田郡西大平)にまで広がり、また奉行として仕事をした伊勢山田(お伊勢さん、伊勢神宮)にも及び、最後は大坂にまでエピソードが残されることになるのだった。

(V) 寺社奉行(評定衆 その③)

大岡越前守は町奉行として「お裁き」だけでなく江戸の行政全般を任されてきた。二十年間もの長きにわたって。町奉行の任期は

特に決まっていなかったが、これは異例の長さである。だが、それだけでは終らなかった。さらに続けて寺社奉行に昇進することとなる。これもまた実に異例の人事であった。同時に担当し続けてた評定衆（評定所の一員）、つまり「中央行政官僚」という仕事はこれで終わりにはならなかったのだ。

寺奉行、社家奉行は一般に鎌倉時代以降の武家政権内におかれた職である。江戸徳川政権初期は室町幕府の名門の出で、南禅寺の僧だった金地院崇伝がこれを取り仕切っていた。（俗説だが、大坂の陣の口実として、梵鐘に「家康の二字が仕込まれている」という、方広寺鐘銘事件を思いついた人、ということになっている。）僧侶の人事を統括する僧録というのが本来の立場だったが、やがて家康の最強のブレーンとなる。法制・外交・宗教政策など幕府の基礎を固めた人として有名。キリスト教の禁止や、寺院諸法度・武家諸法度・禁中並公家諸法度の制定にも関わる。寺院を行政末端機構と位置づける「寺檀制」を創出したのも彼である。

彼が没したのちに（寛永一〇年・西暦一六三三年）、將軍直轄の職として寺社奉行職が作られた。ということ、譜代大名の任ぜられる位の高い役職だったのだ。江戸時代の寺社奉行の仕事は「社寺、社寺領の人民、神官・僧侶の支配だけでなく、楽人・連歌師・陰陽師・土筆見・基将棋などを管轄支配する」というかなりの内容を持つ行政機関であった。

担当する奉行の定員は四人、すでに述べたように通例では旗本ではなく大名、それも五〜一〇万石の家柄の若手が任ぜられた。これも大名のつとめる役職「奏者番」との兼務で、その後には大坂城代や京都所司代を経て老中へという出世が期待される重要なポストとも見られていた。まわりは有望な大大名、それも「これか

ら」という若手が中心だった。

そういうお役目にそろそろ引退も考えられる六〇歳というベテランの能吏が加わったのだから、まさに異例なことであった。この時代のこと、越前守もさぞ身分の違う同僚相手に苦勞したことだろう。しかしそれはお互いさまだったはずだ。

笹間良彦著『江戸幕府役職集成』には次のように書いてある。

大岡越前守が享保二年に江戸町奉行を勤めた時は、家禄一千九二〇石で、三千石高であったが、十年に二千石加算されて三千九二〇石となり、元文元年にさらに二千石加算され、五千九二〇石となったが、万石級のつとめる御寺社奉行となつたので大名格扱いとなつた。寛延元年には矢張り万石以上のものの勤める御奏者番を兼帯したので、四千八〇石の加増を受けて一万石の大名となつた。

この、仮の大名から正式な大名となったことによる具体的な効果は、城中の詰所に居場所を与えられたことだ、という話がある。奏者番をつとめる大名は江戸城（千代田城）内の控への部屋が決まっていた。特に寺社奉行としての控への間はない。寺社奉行の業務、月番は各人の藩邸で持ち回りというから問題ないが、越前守の城内での居場所がない。正式な大名として奏者番をもつとめることになって、普通とは逆だがようやく控への間が決まり、落ち着くことができたという。『江戸幕府役職集成』（二二四頁）には「万石の格を受けてさらに御奏者番を兼帯して雁の間席となつた」とある。雁の間は「通常三万石以上の新規譜代大名の控へ間で、三万石以下、無城の大名」の控へるべき「菊の間」ではない。これも奏者番にはふさわしい、と異例のあつかいだっただのか。これが若手の寺社奉行から受けた「いじめ」と「その解消」の

ような話として伝えられている(『徳川実紀』)が、越前守はそういう事態にも上手に対処していたはずである。

【詰所の説明】(ウイキペディアより)

大廊下……將軍家の親族(御三家、御家門)、加賀前田家。

溜の間……会津藩松平家、彦根藩井伊家、高松藩松平家の三家のみ、代々で、それ以外は一代かぎり。幕府の政治顧問を担う少数の有力譜代大名。

大広間……国持大名(国主)および准国持大名(准国主)、及び四品

以上の官位を持つ親藩および外様大名。

帝鑑の間……譜代席とも呼ばれ、この部屋に詰める大名が譜代大名。ただし真田家など外様でもこの席に移った大名もいる。

柳の間……五位および無官の外様大名。交代寄合や高家などの旗本も。

雁の間……幕府成立後に新規に取立てられた城主大名。

菊の間……幕府成立後に新規に取立てられた無城大名(陣屋大名)。

【引用文献・参考文献】

利他(りた)の思想の庚申塔 (柳島の八幡宮 万治三年銘庚申塔)

平野文明

一はじめに
便利になったものです。
茅ヶ崎でも、道ばたや神社やお寺の境内などに石仏が祭られて

『大岡越前守忠相』沼田頼輔著 明治書院 一九二九年
『大岡忠相』大石 学著 吉川弘文館 二〇〇六年
『江戸のエリート経済官僚 大岡越前の構造改革』安藤優一郎著 日本放送出版協会 二〇〇七年
『江戸の銭と庶民の暮らし』吉原健一郎著 同成社 二〇〇三年
『村 百姓たちの近世』水本邦彦著 岩波書店 二〇一五年
『通貨の日本史』高木久史著 中央公論社 二〇一六年
『勘定奉行の江戸時代』藤田寛著 筑摩書房 二〇一八年
『勘定奉行萩原重秀の生涯』村井淳志著 集英社 二〇〇七年
『百姓の江戸時代』田中圭一著 筑摩書房 二〇二二年
『特別展 大岡越前守忠相と豊川 解説図録』所収「幕府公文書と大岡忠相」大石 学著 (豊川市桜ヶ丘ミュージアム・中日新聞社 二〇一八年)
『江戸幕府役職集成』笹間良彦著 雄山閣出版 一九七六年
『日本史事典』 朝倉書店 二〇〇一年 (二〇二四年八月五日 記)

います。石仏には文字が刻みつけられていて、まれにですが、お経の一節があつたりします。
しかし、その一節が何というお経から引用されているのかな

ると、素人の私には調べようがないのでした。

最近、このことの調べが簡単にできるようになりました。その一節をパソコンの検索欄に入れて調べます。

漢文ですが、モニターにお経が表示され、検索した一節が着色されています。何というお経のどの部分かが瞬時に分かります。

どんな経文でも分かるというのではないでしょうが、石仏に刻まれているのは有名なお経が多いのでヒットする確率は高いのです。

柳島の鎮守、八幡宮の境内の裏手に六基の石仏・石碑が並んでいます。向かって最も右側の庚申塔にはたくさん文字が刻まれており、その中にお経から取った文句があったのですが、従来、文字そのものが読みにくく、その一部が経文だったことも分かりませんでした。パソコンを使ったところ判明したので、ここに紹介します。

二 この庚申塔の特徴

次のような特徴を持っています。

(1) 塔には「万治三年庚子(かのえね)二六六〇」と刻まれています。万治三年は江戸時代の初期にあたり、建立された年です。

茅ヶ崎市内には一〇〇基に近い数の庚申塔がありますが(注記)、この塔はその中で古い方から六番目に当たっています。市内では初期のものですね。

江戸時代を通して庶民の信仰・習俗である庚申信仰が流行していました。特に初期に建てられた塔は類型化する前の姿をしていますので、信仰が始まる契機、信仰の初期の内容などが分かるのではないかと筆者は考えています。



図1 境内の石仏 向かって右の3基が庚申塔

(2) 石仏は、平安、鎌倉時代から供養塔として現れました。江戸時代になると庶民も建立するようになり、爆発的に数が増えました。

江戸時代初期に建てられたものは、堅い安山岩が使われています。石の質は緻密で堅牢ですが、その分加工がむずかしかつたと思われる。柳島の例は建てられてから三六〇年ほどを経ています。破損していません。ただ、堅い石材なので文字

の彫りが浅く、大変読みにくいのです。

この柳島の塔と形がよく似た庚申塔が、市内香川の諏訪神社境内にあります。その年銘は寛文十年(一六七〇)、やはり文字の彫りが浅く、判読するのはむずかしいです。

三 銘文の判読

銘文の読みに取りかかりましょう。

この塔は次の二つの文献で資料紹介されています。

文献一 資料館叢書3 『茅ヶ崎の庚申塔』七八頁

文献二 資料館叢書13 『茅ヶ崎の石仏』1(鶴嶺地区)二九一頁



図2 万治3年銘の庚申塔

文献一に収録されている石仏の調査、報告書の作成、刊行には筆者も携わりました。しかしこの塔の銘文の判読には歯が立たず、当時、茅ヶ崎郷土会の会員であった天ヶ瀬恭三さんにご指導頂いたものです。この経過は本書の四一頁、一六七頁に記されています。天ヶ瀬さんはその後お亡くなりになりました。

文献二は茅ヶ崎市文化資料館が「文化資料館と活動する会」民俗行事部会」と共同して行った鶴嶺地区の石仏調査をまとめたものです。筆者もこの部会に加わっていました。当該の石仏は二九一頁に報告されています。やはり銘文の読みはむずかしかつたので、同頁に「銘文・種子は資料館叢書3『茅ヶ崎の庚申塔』を参照した」と記してあります。

文献二は文献一を元にしてはいえ、両者の読みには違いもあります。文献一と二に印刷されている銘文の文字を画像にして下段に掲げます。両者を読み比べ、異同を行毎に記し、その後に筆者の読みを加えます。

両方の文献で「□」は文字一字が読めない場合（二文字の場合

※銘文・種子は資料館叢書3『茅ヶ崎の庚申塔』を参照した

<p>子二月吉日 本願善福寺隆真</p> <p>□□善男善女集数年庚申奉</p> <p>如等所行是菩薩道□□覺悉</p> <p>厥庚申者半夜凌睡眠離生死當夜</p> <p>万治三年相州柳嶋村施主</p>	<p>敬</p> <p>白</p> <p>當成</p> <p>佛</p> <p>待</p>	<p>目</p> <p>耳</p> <p>口</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------	----------------------------

【金剛界 大日如来】
引 ア

【阿閼如来】
子 ウン

【金剛界 大日如来】
来 プアン

図4 文献二の読み

<p>子二月吉日日本願善福寺隆真</p> <p>□□善男善女集数年庚申奉待□</p> <p>如等所行是菩薩道漸々修覺悉當成仏</p> <p>厥庚申者半夜凌睡眠離生死當夜</p> <p>万治三年相州柳嶋村施主□□敬白</p>	<p>目</p> <p>耳</p> <p>口</p>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------

引 子

図3 文献一の読み

は□□、また、傍線は読みに疑念が残った場合を示しています。筆者の読みは筆者撮影の画像に依りました。時間を違え、日を違えて撮影した数十枚の画像を見ました。写真をここに印刷しても文字ははつきりしないので掲載しません。拓本を、柳島にお住まいだった杉山 全云員がとられました。文字は読めなかったとのことでした。

また、この塔には三個の種子(しゅじ) 如来、菩薩、天部の神々などの尊名を象徴的に梵字で表記したものがありますが、今は触れません。

【二行目】

文献一、二の違いは少ない。「施主」とその下の「敬白」の間に文献一は読めない文字を二字を想定し、文献二は読めない文字はなかったとしている。また、「敬白」は「敬」を右側に高めに、「白」を左側に下げて配置している。石仏では干支(えと)の書き方によく用いられる書き方である。この一行目は読める文字が多い。筆者の読みは次のとおり。

万治二年相笏柳嶋村施主□

敬

白

【二行目】

文献一の読み

厥庚申者半夜凌睡眠

離

生死当夜

文献二の読み

厥庚申者半夜凌睡眠離生死當夜

この行は読めない文字が多い。文献二を調査するときも読めない

かつたので文献一の読みをそのまま取り入れて、不確かな部分に傍線を引いてある。

文献一では「離」を□で囲み、「離」でない可能性があるとしている。二では、傍線の部分を疑念が残る読みとしている。

そのような配慮をしてもこの読みでは意味が通らない。強いて「厥(それ) 庚申は半夜睡眠を凌(しの)ぎ生死を離れて夜に当たる」と読んでみても全く意味をなさない。

筆者は次のように判読した。□で囲んだ「病」と「尸(し)」は確信のもてない文字である。

願庚申者□病□睡眠離□□□尸

文献一、二で読んでもある文字が、筆者にはそうは読めなかった。しかし私の読みでもやはり文意がつかめない。特に行末の「尸」は自信がないがそれらしく見えなくもない。ただ最初の文字は「厥」ではなく「願」であることが分かった。

かつて広く民間では「庚申(かのえさる)」の日に「庚申待(こうしんまち)」あるいは「庚申講」、「守庚申(しゅこうしん)」という行事が行われていた。この夜、眠ってしまうと人の体の中にいる三尸(さんし)の虫が体を抜け出して天に昇り、その人の悪行を天帝に告げる。悪行の罰としてその人に悪いことが起こるので、庚申の日の夜は眠らずに過ごす、という行事だった。

この行の、読める文字からの推測だが、以上の伝承を踏まえて銘文が刻まれていると思われる。冒頭の四文字は「庚申(待ち)を行つての願う事は…」という意味が、「病」には病を避けるということ、「尸」には「三尸」、「睡眠」にはこの夜は眠らずに過ごすという意味が伺えるのである。「離」は三尸が体を離れると

いうことではないだろうか。

なお、守庚申、庚申待の行事は早くは平安時代の記録に表れている。引用文献一の二三頁へ参照のこと。

そのように考えると、二行目が表現していることから、万治三年のころ、柳島では庚申の行事を行っていると思える。

【三行目】

文献一の読み 如等所行是菩薩道漸々修覚悉当成仏

文献二の読み 如等所行是菩薩道□□覚悉

俣

當成

全部で五行からなる銘文の中央の行である。

文献一では行末の三文字「当成仏」を続けて一行にしているが、二では「當成／佛」を左右に振り分けてある。これは行の下に「聞か猿」があり文字を刻めなかつたからである。ということは、猿の像を入れた塔が先に作られていて、文字は後で加えられたということになる。

文献二は、疑問の箇所傍線を振り、「漸々」の二文字を読めないとしているが、塔に刻んである文字の配置を表している。

經典からの引用ではなかろうかと筆者が類推したのはこの行である。經典には次の様にあつた。□□は改行を表す。

汝等所行 是菩薩道／漸漸修學 悉當成佛

『妙法蓮華經』葉草喩品(やくそうゆほん)第五の中の一節で、

世尊が述べる偈(げ) 仏教の教理を説く詩)の最後の二行である。岩波文庫『法華經』上 二八六頁(文献三)から引用した。

塔の中央に配されているのは、五行ある銘文の中で建立者が最も重要とした一行だからである。

二つの報告書は、一字目の「如」(一字目)と、「覚」(文献一では一二字目、文献二では一一字目)を読み違えているが、「汝」と「如」、「覚」と「學」は似た字形だから無理もない。正しくは「汝」と「學」であつた。

この一句の意味などは後に触れる。

【四行目】

文献一の読み □□善男善女集数年庚申奉待□

文献二の読み □□善男善女集数年庚申奉 □ 待

□

二行目に連続している行で、塔の建立時に行われていたであろう庚申待(講)の行事を具体的に述べてあるところだから、行頭の二文字が読めないのが残念である。文献二が実際の文字配列で「待」がずれているのは下に「言わ猿」があつて文字を入れる余地がなかつたからである。行の左側にも一文字ありそうだが文字ではないかもしれない。筆者は次のように読み下した。

□□善男善女集まりて数年庚申を待ち奉る

すでに庚申待を数年行っているということがわかる。

【五行目】

文献一と同一の読みはほぼ同じ。同一は「吉日」と「本願」の間を少し開けてあり、塔の文字配置に近い。刻字は次のとおりで読めない文字はない。

文献一と二の読み 子二月吉日 本願善福寺隆真

この行は一行目に連続している。四行目でも述べたが、二行目は四行目に続き、一行目は五行目に連続しているのである。

一行目は、「年号(万治三年) + 施主」、五行目は「十二支と月日(子二月吉日) + 本願主(善福寺隆真)」となっており二つの行の構造はおなじである。

なお、隆真和尚について、『柳島のうつりかわり』(平成二年柳島自治会・五三会刊二〇頁(文献四)は「二代 離職年、寛文十二年(一六七二)」とし、『柳島 いま・むかし』(平成二十八年刊)(文献五)は離職年は同じで、三代としている。

万治三年(一六六〇)の十干十二支(じっかんじゅうにしじゅうに支)は「庚子(かのえね)」。庚申塔は「庚申(かのえさる)」の年に建てられたものが多いが、次の庚申の年は一六八〇年で二十年待たなければならぬ。十二支は違っているが「庚(かのえ)」という文字が庚申塔の「庚(こう)」と同じ万治三年を塔建立の年としたのであろう。

江戸時代の年は、年号と干支で表す(この塔の場合は「万治三年」と「庚子」)のが建前だったが、実際は十干を略すことが多く、この塔でも「庚」が省略されている。(平野文明「石仏の年号銘の十干

十二支表記参照」(文献六)

一行目の「施主敬白」は五行目の「本願善福寺隆真」と対になっている。「施主」は塔を建てた人々、つまり庚申講中のことであり、「本願」は庚申信仰を広めようという願を持つ人、つまり善福寺の僧、隆真和尚のことである。施主として、石仏には個人名が連なっていることが多いがこの塔には施主の個人名はない。

【銘文のまとめ】

以上、五行にわたる銘分の内容は次の様にまとめることができる。

この庚申塔は、万治三年(一六六〇)に、善福寺の住職、隆真和尚の指導のもとに村内の庚申講中によって建てられた。そのころ、すでに行事として庚申待が行われていた。それは、睡眠中に体内の三戸が抜け出るのを防ぎ、講中の者の無事を願うというものであった。

今では殆ど消滅したが、神奈川県内では庚申講が盛んに行われていて、庚申(かのえさる)の日は体中の三戸の動きを押さえるために講中が集まって寝ないで過(こ)していた。この行事が、三百年ほどの昔も変わらず行われていたらしいことが、万治三年の庚申塔の銘文から伺われるのである。

四 自利(じり)と利他 庚申塔にある妙法蓮華経の偈

読み下しは、文献三の岩波文庫の同じ頁に次の様に記されています。

汝等の行(ぎょう)ずる所は 此(こ)れ菩薩道なり
 漸漸(ぜんぜん)に修学して 悉(ことごと)く当(まさ)に成仏すべし

この世尊の偈は、四文字を一句として二百一八句(二句を一行にして二〇九行)に及ぶ長大なものであり、塔にある四句はその最後の二行(二〇八行目・二〇九行目)で、偈の結びの部分です。

後ろから四行目(頭から一〇六行目)に

「今、汝等のために 最も実なる事を説かん」という一行に続けて、一〇七行目は、

「諸(もろもろ)の声聞衆(しょうもんじゆ)は 皆、滅度せるに非ず」の一行があります。

塔に引用されている部分はこれに続く二行です。

この八句、四行を理解するには、用いられていることばの意味を知ることが必要です。

まず「声聞衆」ですが、『妙法蓮華経』には「独覚(どっかく)、菩薩」という単語と一緒にいろんな場面で使われています。

「声聞」の意味は、

仏の教えの声を聞いて修行する人。自分のさとりしか考えない聖者、自己の完成だけを求め励む出家。(中村 元『佛教語大辞典』縮刷版昭和五十六年東京書籍株式会社刊の七三四頁)(文献七)ちなみに「独覚」の意味は、

独力でさとりに向かう人。他人の教えを聞かず、自分独自の方法でさると者。他人のために教えを説かない、利己的な者を大乘の立場からいう…。(同事典二〇二頁)

また、「菩薩(菩薩道)」については、

さとの成就を欲する人。さとの完成に努力(修行)する人。仏になろうと志す者。仏の智慧を得るために修行している人。大乘仏教の解釈によると、そこに利他的意義を含め、大乘の修行(菩薩道)者をいう。自ら仏道を求め、他人を救

済し、さとらせる者。上に向かつては菩提を求め(自利)、下に向かつては衆生を教化(利他)しようとする人。(同辞典 二二九頁)です。

「声聞」と「独覚」は自分のさとりを求める者(自利)で、「菩薩」は自分のさとりと同時に衆生に救いの手を延べる者(利他)という違いがあります。菩薩道を行う者は自らの立場を大乘(だじよう…さとりに至るために乗る大きな船)といい、声聞と独覚の立場を小乗(小さな船)と呼びました。さとりに至る船は大小二つあるが、小さな船も結局は大きな船に収容されてさとりに至ると、世尊は大乘の立場から教えたのだそうです。

次に「滅度」は「さとり」のこと(同辞典一三五八頁)。寂滅・円寂と同じ言葉で、「煩惱の火が消えはてた、心の究極の静けさ」とあります。(同辞典 六一八頁)

「成仏」は「釈尊がブツダガヤでさとりを開いたこと。さとりを開くこと」とあります。(同辞典七四六頁)

以上のことばには他の意味もありますが、ここで扱うテーマに関する意味に限り紹介しました。

以上のことから、偈の最後の四行の意味は次のようになります。

一〇六行 おまえたたちのために、最も大切なことを今から説こう

一〇七行 すべての声聞たち(小乗仏教の者)は滅度(さとり)することができない

一〇八行 おまえたたちがやるべき事は菩薩道(大乘仏教||利他)である

一〇九行 順次修行と学問に励み、すべての者は成仏しなければならぬ

この四行で述べてあることは、「自利の修業をする声聞たちはさとる事ができないが、世尊の言葉を聞いてはおまえたちは利他の菩薩道を実践してすべての者が成仏するように」と筆者は解しました。

しかし、大きな疑問がありまして、岩波文庫の二八七頁にある、サンスクリット語原典からの訳では、「声聞たちは平安の境地に達している」と、筆者の解釈とは一八〇度違う訳が載せられているのです。このことについては考えが及ばないのでこれ以上は触れません。

五 おわりに

『妙法蓮華経』薬草喻品五の偈で表されている世尊の教（おしえ）は、最も縮めて述べると、「菩薩道を実践し成仏すべし」ということです。

この文言が八幡宮の万治三年の庚申塔に刻まれているのは、善福寺の隆真和尚の指導によるものですが、隆真和尚は、塔建立のころにすでに行われていた庚申待の行事に、菩薩道という仏教上の意味付けをしようとしたと言えらると思えます。つまり、民間で行われている民俗行事を仏教化する（仏教の中に取り込もうとする）事例の一つとして捉えることができるのではないのでしょうか。しかし、民俗行事である庚申信仰を、仏教の理論で意味づけようとしても、民間の信仰行事と仏教との間には大きな差があるの

で難しいことではなからうかとも思えるのです。

【注記】

『茅ヶ崎の庚申等』（1977年刊行六七頁）は九四基、『茅ヶ崎市史』3（1980年刊行三八六頁）は九四基、『文化資料館調査研究報告15』（2007年刊行五二頁）は八九基としている。

【引用文献】

- 一 資料館叢書3 『茅ヶ崎の庚申塔』昭和五十二年茅ヶ崎市教育委員会刊 七八頁
- 二 資料館叢書13 『茅ヶ崎の石仏』1（鶴嶺地区）平成二十七年三月文化資料館刊 二九一頁
- 三 岩波文庫『法華経』上 坂本幸男・岩本裕 二〇〇六年版 二八六頁
- 四 『柳島のうつりかわり』平成二年柳島自治会・五三会刊二〇頁
- 五 『柳島 いま・むかし』平成二十八年刊
- 六 平野文明『石仏の年号銘の十十二支表記』『石仏調査ニュース 茅ヶ崎の石仏』第一号所収 茅ヶ崎市文化資料館 二〇〇九年刊
- 七 中村元『佛教語大辞典』縮刷版昭和五十六年東京書籍株式会社刊 七三四頁

（令和六年八月一日 記）

風 自由投稿欄

ラデツキー行進曲

(ウイーンで、故小澤征爾氏を偲ぶ)

本誌の前号でロンドンのフィッシュ&チップスを紹介させていただきました。記事を読まれた方々から「是非英国へ行きたい」、「本場の味を試したい」などの反響をいただき大変嬉しく思っております。

今回はオーストリアのウイーンを尋ねたことを紹介いたします。オーストリアでよく食べられている料理があります。仔牛肉を肉たたきで薄く延ばし、小麦粉・卵・パン粉などの衣をつけて、油で揚げたもので、ウインナーシュニツェル(ヴイナーシュニツェル・ウイナーシュニツェルとも)と呼ばれる料理です。フィッシュ&チップスは魚を揚げますが、こちらは肉で、似た様なものです。

今年二月に小澤征爾氏が御逝去なさいました。

一九九八年に娘とウイーンに行ったとき、小澤氏に偶然お目にかかりました。気さくにお話ししてくださり、握手もサインもしていただいたのを、懐かしく思い出します。その後、小澤氏が指揮をなさった数々の曲を録音で聞き、またビデオを見返したことに

導かれて、今年の六月に小澤氏を偲ぶ旅に娘と行って参りました。

ウイーンでは、行った先々で出会う方々が、「オーケストラコンダクターのOzawaは突出して素晴らしかった」などと絶賛して下さり、日本人として嬉しく誇りに思い、小澤氏が偉大な指揮者であり、真の国際人として尊敬され続けておられる理由が私なりにわかった気がします。

今回の旅では、最優先で、一九九八年に小澤氏にお会いしたインペリアルホテルのラウンジに行き、お茶を飲んでみますと、有名な音楽家が三組、次々と集まられ、握手し合い、私達にまでも握手して下さり、最高のハーモニーには握手が欠かせないということが、活き／＼と伝わりました。

そういえば、ラデツキー行進曲は、演奏時に、聴衆の拍手が伝統となり、曲はどんどん盛り上がります。演奏者と聴衆が一体となって生み出される音楽の無限の可能性と迫力が受け継がれていると思えました。

音楽はそれぞれ恵まれた環境に助けられ生み出されると確信し

川村美子



モーツァルト像とト音記号

ますが、ウィーンには、壮大な王宮や美しい建物、公園が沢山あり、クラシック音楽がびったりで、あちらこちらから名曲が流れています。

ロンドンには、古い建築と現代建築のビルが一緒に並んでいて素晴らしく調和し、街には新旧のヒット曲が流れています。

茅ヶ崎では、明るい太陽と海をバックに湘南サウンドが誕生しています。世界中に、様々な音楽が、人々に生きる喜びを与えながら流れ続けています。

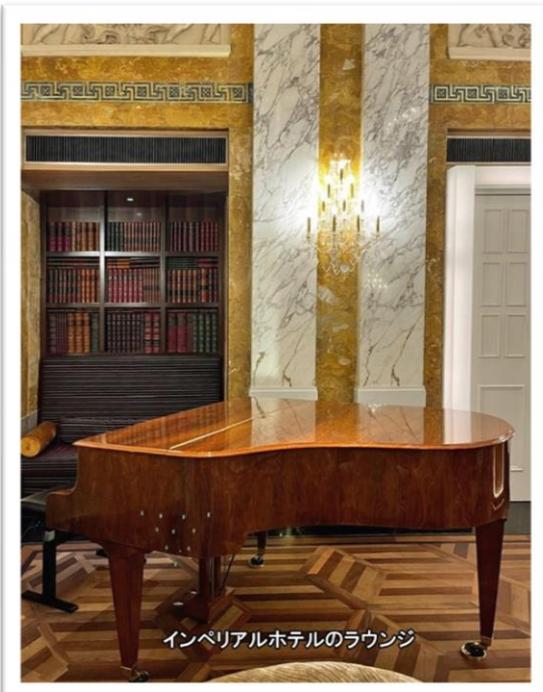
そして故郷や、故郷の人々などを想い、祈ったり、気が付けば故郷の懐かしいメロディを口ずさんでいたり、リズムカルな人生を音楽に例えたりもしています。

茅ヶ崎郷土会にもラデツキー行進曲演奏のように拍手を！

写真の説明

- ①モーツァルトの銅像と筆者。芝生にピクニックの花のト音記号が植えられています。
- ②オペラ座の正式名称は国立歌劇場。小澤征爾さんはその音楽監督を務められました。
- ③一九九八年に小澤征爾さんに会ったイ

ンペリアルホテル
のラウンジとピア



インペリアルホテルのラウンジ



国立歌劇場

人間の有り様

藤間克子

人間の有り様よう問われている証し あまた動植物絶滅
老惧とぞ

「肉まつり」今朝のチラシを見たたんヒトが肉食動物め
きて

クリニックの始まるを待ち並ひとびいる大方の女スマホ撮る

「この齡よもうどうなつても」と言いながら今日も内科
で処方箋もらう

温かきうどん食みつつ自らの老い先如何にと思いはめぐる

木犀の花こぼしつ小さなる一枝を手折つまり亡夫に供え

ぬ

風吹けば風に後う大擲率直に伸びゆく梢を見上ぐ

(短歌結社「新暦」会員)
(茅ヶ崎郷土会々員)

松下政経塾が茅ヶ崎にあるという話

長谷川由美

仕事柄なのか、松下政経塾と聞くと「尖った政治家を輩出するところ」と思っていました。ところが、文化活動を通じてご縁ができ、壮大な理念の発信元であり、この茅ヶ崎にできるだけよくしてできたのだと思うようになりました。

ご縁の始まりは、お電話でした。「音貞オツペケ祭のイベント案内を見たが、今回は行かない。今後も活動の予定があれば教えて欲しい」と。後からお電話をくださったのは、当時の塾頭金子氏だとわかりました。そして、二〇二二年十一月の川上貞奴版「サロメ」公演をご観覧くださいました。

「本格的な芝居をされているんですね」と目を丸くされた政経塾関係者様たち。その後、塾生さんが復刻劇に出演され、音二郎の演説を演じたり、お力添えをいただくようになりました。

私も、塾の行事であるスピーチコンテストや、講演会に参加したり、構内を見学させていただく機会を得ました。そこは、「国家百年の大計をつくり、実践者になるための場」として、とても豊かな空間が広がっていました。印象深いことを紹介します。

「夜通し語り明かすことのできるラウンジ」

全寮制の寮の中に、ソファとテーブル、書棚のラウンジがあり、ここでは議論をし、お酒を飲み、朝には倒れている人がよくいたそうです。寮の部屋は、中央に共有のスペースがあり、そこから

四つの個室につながっているのが「ユニット」。ここにも共有の語らいの場があります。

「アーチ門」

正門から入って進むと、この門に圧倒されます。塾のホームページでは、次のように紹介されています。

松下政経塾のシンボルでもある「アーチ門」のレリーフは、彫刻家・加藤昭男氏作で、タイトルは「明日の太陽」。左に「力と正義」を表すひまわりを手にする男性像、右に「愛と平和」を表す鳩と女性像、その下に「困難」を表す雲を配し、この門をくぐる者はどの様な困難があろうとも「真理」に迫ろうとする構図になっている。

「日本家屋と茶室」「松心庵」

松下幸之助氏が来訪時に宿泊した建物。日本の伝統文化を体得してこそ、世界に通用する国際人であるという方針から、塾生は茶道のお稽古が必須で、床の間には松下幸之助氏直筆の「素直」のお軸が架けられていました。またこの建物は、小高い丘の上に立ち、松が小さい頃は広く豊かな砂浜と海を一望できただろうと思われまふ。海からの風は、夏には涼を運び、冬も気候温暖過ぎしやすい茅ヶ崎を感じられる場であつたでしょう。古くは九代目團十郎の狐松庵、海浜旅館の茅ヶ崎館の姿ともイメージが重なり、湘南の別荘文化の姿を伝えていることに気づきました。



2023活弁公演の記念撮影 アーチ門前にて

一代でパナソニックホールディングスを築き上げ、「経営の神様」と呼ばれる松下幸之助氏。面接で必ず「あんさん、運がいいですか？」と聞いたそうです。

ご本人は、港で働いていて船から落ちたが助かった。自転車で走っていて、オート三輪に跳ねられ、チンチン電車に轢かれそうになるも無事だったという経験をお持ちで、自分は運が良いと思っているけれど、この事故は不運とも捉えることができる。同じことが伸びる人材だと考

えられていたとか。さて、ここまできて、誰かを思い出しませんか？

そう、川上音二郎、貞奴さんです。困難だらけの中でも、前へと進んでいった彼らです。音貞(音二郎・貞奴)の二人は、「運の良い人」で、100余年前に、塾の理念のように国家百年の大計をつくり、実践した人ではなかったでしょうか。松下政経塾様が、音貞オツペケ祭にご協力下さるのは、地域の文化活動への貢献であり、百年前からの日本のリーダーのご縁によるものと思えてきます。

昨年には講堂で、音貞オツペケ祭「声色かけあい活弁」公演を行わせていただきました。今年は、「明日の太陽」を掲げるアーチ門前を舞台とし、復刻野外劇「サロメ」を上演いたします。奇しくも、ご縁が繋がった二〇二一年と同じ演目を上演できることは、音貞、松下幸之助氏という偉人のおはからいのようにも思えてきます。

湘南茅ヶ崎は、東京から一定の距離があり、おおらかな気風と穏やかな気候。干渉しすぎないゆるさがあり、堅苦しいことにとらわれず、大いなる理念を発信し、育んでいくのに良い地であると、改めて思っています。

【二〇二四 音貞オツペケ祭】

野外劇 川上貞奴版「サロメ」 大正四年台本使用

ところ 松下政経塾アーチ門前&構内見学会

とき 九月二十九日(日) 十五時～十六時四五分

チケット 二千円

予約先着 定員百名

ご予約 080-6729-8008 otosada.oppkesai@gmail.com



茅ヶ崎ゆかりの人物館 純水館企画展

『茅ヶ崎純水館物語 糸もつくるが人もつくる』

ゆかりの人物館は半年ごとに展示替えがあります。今回は小津安二郎と野田高梧、前々回は加山雄三がテーマでした。茅ヶ崎では知名度の高い人物を取り上げてきたゆかりの人物館が、今回ほとんど無名だった小山房全(ふさもち)を取り上げました。大胆な挑戦だと思います。それに企画・監修者として関わることが出来たのは、郷土史研究に関わる者として大変幸せなことだと思っています。残念ながら来館者数は多くありませんが、「純水館文化」の素晴らしさを認めていただいた東京新聞、朝日新聞さんに記事として大きく取り上げていただきました。

展示紹介

入口の展示です(図1)。企画展は『茅ヶ崎純水館物語』と名づけていますので、展示は物語が展開するようにしました。入口付近が展示エリアの1です。純水館のイメージを持っていただくために再現模型が展示してあります。200分の1の模型で、全てがボランティアによる手作りです。とても素晴らしい模型が完成し、来館者にも大好評です。

純水館研究の特長は資料がほとんどないことでした。長野県小諸市、岡谷市の資料や現存する写真、私の集めた資料をもとに推測した部分も含めて何とか形にしました。



図1 純水館再現模型

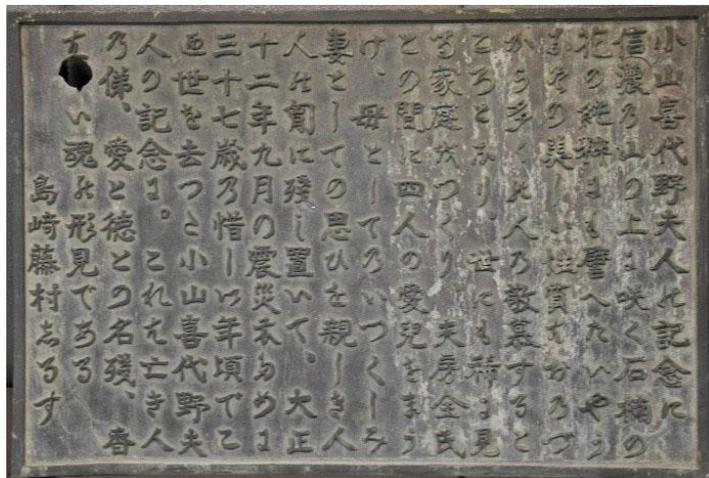


図2 小山喜代野・島崎藤村の里帰りプレート

名取龍彦

エリアが8までありますので、足を運んでご覧いただきたいと思います。長

野島の皆さんには、特に展示に関して大変なご協力をいただきました。逸品は小諸市立藤村記念館から借用した展示エリア7の「小山喜代野・島崎藤村の里帰りプレート」(図2)です。房全の妻の喜代野は島崎藤村の教え子です。

純水館研究について

私は長野県出身です。小学校、中学校時代(一九六〇〜七〇年代)には製糸工場で働く「糸取り」の高齢の女性が近所にお住まいでしたので、何となく製糸業に興味は持っていました。茅ヶ崎で職を得た後、長野県から茅ヶ崎に移り住み「純水館茅ヶ崎製糸所」を経営していた小山房全館長の存在を知りました。私と同郷の信州人であることが興味、関心を高めました。そこから、資料収集の作業が始まります。純水館研究は資料集めが研究の根幹です。世に知られていない資料を探し出すことが楽しみとなりました。多くの資料は、ヤフー・オークションと「日本の古本屋」というインターネット上のサイトから探しました。以前だったら決して入手できなかった資料が、この二つの方法によって私の手元に集まってきました。大げさに言えば、日本中に散在する純水館資料を自宅のパソコン上で探すことが出来るのです。

コロナ禍で仕事が自宅待機となり時間的余裕が生まれましたので、今まで集めた資料を整理してまとめました。また、寒川文書館へ足繁く通い、「横浜貿易新報」(現 神奈川新聞)から純水館の関連記事を抽出しました。今から考えると、まとまった時間が突然できたコロナ禍がなければ、研究は進まなかったと思います。四年程前に、平野会長さんへ純水館の研究をしていることを話したところ、私がまとめた資料に興味を持ってくださいました。

そして、会長さんが「名取龍彦氏著 糸もつくるが人もつくる」教育者、社会教育家としての純水館主・小山房全」として郷土会会報(二〇二二年一月発行一五〇号)に資料紹介を書いてくださいました。また、郷土会で二回も講演をする機会を設けてくださいました。この講演が、ヤマダ電機北側の純水館掲示板の建設にもつながります。

会報一五〇号を読んだ郷土会々員の尾高さんが、小諸へ行き小諸市立小山敬三美術館へ会報を渡します。美術館学芸員の中嶋慶八郎さんから、会報に紹介された資料を読みたいとの依頼があり、すぐに資料をお送りしました。この時が、小山敬三のお孫さんである中嶋さんとの繋がりスタートです。茅ヶ崎名誉市民で洋画家の小山敬三は、小山房全の義弟で、喜代野の弟です。中嶋さんとは、現在、ゆかりの人物館の展示に多大なるご協力をいただくと共に、小山敬三作品の全ての使用に対して著作権(慶八郎さんのお母様、小山敬三のご息女蓉子さんから)の承諾をいただくまでの繋がりになりました。中嶋さんには、昨年七月に茅ヶ崎で、『気韻生動の画家 小山敬三』と題した講演をしていただきました。多くの皆さんのご理解とご協力で今日に到りました。

会期は九月二十九日まで、開館日は金、土、日、祝日です。

お時間のある方は是非ゆかりの人物館で、純水館の世界をご覧ください。

茅ヶ崎ゆかりの人物館

市東海岸南6-6-64 Tel 0467-81-5015

国土交通大臣賞受賞

推薦理由

国土交通大臣賞を受賞！今年の秋に八一歳になる。この歳になっても思いがけないことが発生するものだ。驚きと共に感謝の気持ちがいっぱいである。

植物が好きで、自宅や周囲の花壇の世話をしている。好きでやっていることが、このような賞の対象になるなんて信じられないくらいだ。私一人の力ではなく、協力してくれている周囲の方々のお陰である。

ある日のこと、市の公園緑地課の職員から電話があった。

「あなたの日常の活動を教えて欲しい。その現場を案内していただきたい」とのこと。職員二人が訪ねて来たので現地を案内する。市から県へ国へと推薦され、受賞が決まった。

受賞団体を紹介する冊子には次のような記載がある。

「当会は、柳島第二公園の住民が集まり、愛護会の前身である『チェリーガーデンクラブ』として活動を開始しました。メンバーの高齢化を理由に一度解散しましたが、メンバーの一人であった現代表が意思を引き継ぎ平成二十六年から公園愛護会として活動しています。活動状況は、柳島第二公園と柳島ポンプ場の南側沿道の花壇の除草・清掃や花の植え替えなどの作業を週に何度も行っています。また、毎朝、柳島海岸における海浜植物の除草や植え付けなどの育成も熱心に活動しています。今では春になると、美しい海浜植物（ハマヒルガオ、ハマゴウ、ハマエンドウ）など

前田照勝

が咲き誇り、海浜植物の植え付けによって砂防の流失を軽減する効果も得られるようになりました。公園だけではなく、海岸、沿道を含めたエリアを一体的な美化、緑化推進に努めています」
チェリーガーデンクラブから数えると四十年の歳月が流れた。長いようだがつい先ほどのような気がする。

いざ和歌山へ

第三五回「みどりの愛護」のつどいが和歌山市で開催された。

「花と緑の愛護に顕著な功績のあった全国九七の団体に対し国土交通大臣から感謝状を贈る」という趣旨である。関東地区で二二団体が表彰される。せっかくの機会なので三泊四日の日程で参加した。

五月三十一日がレセプション、六月一日が表彰式と記念植樹が行われる。

五月三十一日(金) 会場のホテルに入るには持ち物の点検と金属探知機のゲートをくぐらなければならない。ものものしい警護ぶりは秋篠宮ご夫妻のご臨席が予定されているからだ。テレビカメラや報道陣の数も多い。参加者のカメラ撮影は禁止とのこと。

七番テーブルへ案内される。メンバーは自分を含めて七名。札幌、石巻、横浜、栃木、名古屋、福岡からの全員と名刺交換する。バイオリンとピアノの生演奏が始まる。拍手で秋篠宮ご夫妻を迎える。国土交通大臣、地元の国会議員、和歌山県知事、和歌山市

長の挨拶が続く。参加者のテーブルは二五番までであった。パラパラの参加者だったらどうしようかと考えていた自分が恥ずかしい。参加者の皆さんはどなたも晴れやかな顔をしている。皇室の御臨席があり、緊張感の中にもその場にいることの幸せを感じる。激励のスピーチや、会場の雰囲気などから思いを新たにしたい。ホテルの料理も豪華であった。テーブル仲間との交歓が続いた。七人は全員が男性、年齢構成は八五歳が最年長、最年少は七二歳だった。初めて会ったとは思えない。そんな親しみを感じたのは自分だけではないと思う。

「名古屋から横浜には年に一度出かけます」

「石巻に来た時には連絡してください」

「また会いましょう！」

再会の可能性を感じつつお開きとなった。

六月一日(土)。九時から式典が始まる。プロローグとしてバイオリンやピアノ、打楽器などの演奏があった。

式典では秋篠宮からのお言葉があり、小学生男女二人による「誓いのことば」で締めくくられた。

秋篠宮ご夫妻が退席する際、舞台の端に起立していた小学生二人にずいぶん長いこと話し掛けられていた姿が印象に残っている。単に儀礼的な出席ではなく、心がこもっているように感じた。

続いて、和歌山城内で行われる、「みどりの愛護のつどい」記念植樹に出席する。式典会場から小人数に分かれて担当者の後に続いて移動する。

この席にも秋篠宮ご夫妻のご臨席があるので、前夜に続き厳重な警護である。

植樹は木製の箱にコウヤマキやウバメガシがすでに植えてあり、



並び、色とりどりの花が植えられている。地元の高校生が作業に加わったという。

五重奏の生演奏が響く中を、秋篠宮ご夫妻が入場する。セレモニーがあり、植樹作業へと移る。作業が終わり、秋篠宮ご夫妻が退場する。後ろを歩く紀子様が両手を振って参加者に挨拶をしていた。

これで一連の行事は終了する。午後からオプシヨンの日帰りツアーに参加する。参加者は一五名、出発は一三時である。前夜の

その根元にスコップで土と水を掛けるという作業である。木製の箱は一五個用意されており、自分は七番の番号を担当する。メンバーは三人であった。

秋篠宮ご夫妻が入場する前に担当者記念撮影をしていただく。

ご夫妻が歩かれる道の両側にはプラントナーが

七番テーブルのメンバーの一人がご一緒だった。

バスの隣席の女性も、高野山の宿坊に泊まるプランに申し込んだものの、中止になってしまったのでこのプランに変更したのだそうだ。紀三井寺(きみいでら)と東照宮を巡る。一七時過ぎには和歌山駅へ戻る。

和歌山駅前で食事をする。「多田屋」という店である。店の表の顔を見ただけで魅せられて引き込まれるように入った。入り口付近の看板に書かれた「酒の歴史は数千年、多田屋の歴史はただか九十七年」。この文字には度肝を抜かれた。店に入ると、カウンターの円形状にあり、右側にもカウンター席、奥の方には座敷席があった。従業員がお年寄りばかりなのが気に入った。背中の曲がった女性もいる。裏手からカウンターに物を運ぶ男性も高年齢のようだ。まだ陽が高いのに満席状態、私は入り口付近に座る。二つ空いた先には五〇歳くらいの男性が座っていた。新大阪からほとんど毎日のように通っているようだ。その内、女性二人が空いた席に座る。五〇歳の男性はますます饒舌になる。私をお父さんと呼び、関西人の乗りで話しかけてくる。すっかり自分も酔いがまわり、紀州の酒一覧表を見ては上から順番に飲んでいく。グラスで注がれる酒もあれば、湯飲みのような陶器に注がれる酒もあった。店の客と一期一会の出会いだった。駅前に出てバスで前夜のホテルへ向かう。

バス停の「和歌山城前」のアナウンスがなかなか降られねばならない。方角は分からない。さてさてどうしたものか思案した。携帯電話で長女に連絡する。しばらくして、男性に声を掛けられる。道に迷ってしまったことを告げると「車でホテルまで送りま

しょう」と言われる。近くに焼き肉屋があつて「ジャン」という店名とのこと。ありがたい、ありがたい。次女が調べると、ホテルまでは車で五分ほどの距離だったようだ。長男がこの方の携帯電話を聞いてくれていた。(後日、茅ヶ崎産のシラスを郵送)。

私からの迷子になったとの電話を受けた長女は、長男と次女に連絡をとり家族全員が大騒ぎになったとのこと。自分が、ホテルから家に電話をしたのは二二時だった。

高野山へ

六月二日(日)。翌日は目的地の高野山へ。これが目的でこのイベントに参加したのだ。ツアーが中止になったのでやむをえず日帰りツアーにしたものの、どうしても高野山へ行きたかった。四時に起床、駅まで三〇分ほど歩き、和歌山駅始発六時八分発に乗る。電車とケーブルカーを乗り継いで八時過ぎに高野山駅に到着。ここでも始発のバスだった。奥の院へ向かう。昨夜の反省もあつて、案内所で聞く。「今日は奥の院方面に行かれて、明日は大門方面に」とのアドバイス。指示に従い一日乗り放題の券を購入する。

バスは坂道を下って行く。あらら、高野山の山の上の方に宿坊が点在しているのかと思えば想像とは大違い。まさに百聞は一見に如かずである。

霊地内を歩く。外国人も多い。大きな墓標が立ち並ぶ。歴史上の人物の名が次々と現れる。織田信長、豊臣家墓所、伊達政宗供養塔、浅野内匠頭と赤穂四十七士の供養塔……。周囲の杉はどれも巨木で太くて高い。根元付近は苔で覆われている。どの供養塔にも苔が青々と生えている。悠久の時の流れをしみじみと味わ

う。まさに歴史書の中を漂っているかのような心地になる。

宿坊は蓮華定院。真田幸村と所縁があり、山門脇の提灯には真田家の家紋六文銭が描かれていた。山門をくぐると石庭の紋様が描かれている。京都の有名な寺院を思わせる。寺の裏手には真田家の墓標が建立されていた。高さは三メートルほどの高さである。受付では諸注意を受け、夕方の瞑想の時間と早朝の読経があることを知らされる。私は今年の五月に亡くなった四歳下の弟の供養をお願いする。

瞑想の時間は四〇分。久しぶりの座禅は長く感じられた。それでも終わってみれば前の心境が嘘のように思えた。この呼吸法は日常でも実践したいものだ。

一八時から夕食が始まる。両隣は外人さん。自分は正座をしていたが隣の男性は胡座を掻こうにも足が長く両ひざを高くあげたままの姿勢で座っていた。私は身振り手振りで、天ぷらは抹茶塩で食べるように教える。男性の隣の奥さんも笑顔で応じていた。この団体はドイツ人であった。総勢二〇名くらいだったろうか。

翌朝は読経の時間。住職とお坊さん四人による読経は、さながら男性のコーラスを聴いているかのような素晴らしいハーモニーだった。途中でお坊さんに促される席に移動して焼香をする。弟の焼香をこのような場でできることを嬉しく感じた。高野山まで足を延ばしたことは正解だったと確信した。この後の住職の説法に感動。「亡くなった人もこの世に居て、皆さん方の行動を見守っている……」。後ろの席から女性のすすり泣きの声が聞こえた。

朝食を済ませて宿坊前のバス停へ。一人の男性が立っている。大きなスーツケースを持っている。宿坊内では軽く会釈する程度

で会話はなかった。バスが到着するまで自己紹介を交わす。この方は四四歳のトルコ人。一週間滞在し、この日に帰国するとのこと。

ケーブルカーに乗ると、このトルコ人男性と再会する。同じ席に座り、橋本までの二時間を過ごす。始めは意思疎通がままならなかったが、彼がスマホの通訳機能を使っただけからはスムーズに会話が弾む。五〇カ国以上の旅をしていること。今回の旅行での浅草の三社祭や京都での体験などを撮った動画を見せてもらう。

「自分の脳がどのように動くかをどう考えるか、人生において非常に重要だと思います」

私が今回の表彰状を見せると、「私も賞をもらっています。ヨロツパの工学博士論文で一位になりました」

「八〇歳になったら貴方のようにになりたい。同じ人種のような気がする。」外国人特有のオーバーな表現と承知はしているが、心に刻まれた言葉である。これからも勇気をもって生きられるというものだ。

いつの間にか和歌山駅へ到着。ここで彼と別れる。いい出会いだったと温かい気持ちになった。和歌山駅で下車する。一昨晩の居酒屋へ直行だ。名刺入れを忘れていたのだ。一時を過ぎていた。昼前なのでお客はまばらだ。「土曜日の夜に名刺入れを忘れたのですが……」

「いっばい忘れ物があるのによく来てくれましたね」と高齢の女性。

名刺入れを手にして、一枚ずつ広げては先日お会いした方々を思い出す。二度と会えない人かもしれないが、この名刺を粗末にはできなかった。

そこへ先日の関西人がやつてきた。先日と同じ席に座る。似ている人だなくと思つたが、帽子の特徴から間違いないと思つた。手を挙げると「あらまあ〜二期二会ですわね!」と驚いた顔をする。咄嗟にこの言葉が出るのだからさすがに関西人である。先日の飲んだ席で自分が発した「二期一会」をしつかり覚えていたのだから恐ろしい。関西人はこの日は母親と来ていて、母親がホテルの連泊を勝手に決めてしまったことを店の女性に話していた。「今日帰るつもりが、おかんに連泊を決められてしまった。頭を冷やすために店に来たんや」とのこと。

一時過ぎの電車に間に合わず二時過ぎの電車に乗る。一時間を経過しても新大阪に着かない。どう間違えたのだろうか? 電車はしばらく停まったままだ。駅の駅名は「御坊」とある。電車が走り始めた。行く先は「和歌山」となっている。どうしたことだ。和歌山から乗ったつもりが、また和歌山へ行くとは? キツネにつままれたとはこのことか。判断力は無い。相談しようにも誰もいない。ここでスマホでも活用すれば良かったのだろう。旅行に来る前にスマホで路線を調べるやり方を知ったばかりだ。この場ではスマホを使うという発想が湧かなかつた。困ったものだ。

そのまま乗っていけばいいものを途中で降りてしまった。駅名は「広川」である。駅の構内は小さな「コンビニ」のようになっている。食事処とお土産売り場がある。女性二人が対応してくれた。事情を話すと、和歌山行きは一時間後になる。この店でお土産の追加を購入する。

「私たちに会えたんだからいいんじゃない」。その言葉に救われる。「海南駅で特急に乗れば和歌山へ行きますよ」と教えられる。和歌山から新大阪へ。茅ヶ崎到着は二時を過ぎていた。

0 茅ヶ崎郷土会 会員募集

茅ヶ崎郷土会

郷土の歴史・民俗・伝説や昔話・石仏・祭礼

・史跡・文化財などを楽しむサークルです。

活動内容

- 歴史・民俗の学習、調査、記録
- 大岡越前守遺跡写真展
- 市民文化祭(茅ヶ崎、みんなのアートフェス)に写真展
- 市内、県内の史跡・文化財の見学会

あなたも一緒に始めませんか!

年会費 1,500円

設立は昭和28年

会員 約70人

連絡先 電話 090-8173-8845 会長 平野文明

総括

サクラの花の下で近所の方々とお祝いの会、サークル仲間との食事会、親しい方からの会食のお誘い、ラジオ体操仲間からのお祝いの席、友人からのお祝いのメッセージ。そして、市長の表敬訪問とその仲間との食事会……。次々と身に余る祝福の言葉をいただいた。有難いことである。感謝の気持ちを忘れずに、これからの行為で恩返しをしたいと思います。

茅ヶ崎郷土会の事業報告

第三〇九回 史跡・文化財めぐり

茅ヶ崎市内の東海道を歩く その②

山本俊雄

令和六年度最初の史跡めぐりは市内編です。昨年度最後のめぐり「市内の東海道を訪ねるその①」に続きます。なお、この催しの事前勉強会は中止しました。

日時 令和六年六月八日(土) 参加者 一三名

コース 茅ヶ崎駅改札前習合(8:50)―4番乗り場から市立病院經由藤沢駅北口行き9:00発のバスに乗り―バス停「本村」着(以下徒歩)

①海前寺―②居村遺跡―③観音堂―④本村の八王子神社―⑤一里塚―⑥市役所前広場の旧寛永寺石燈籠―⑦純水館茅ヶ崎製糸場跡の説明板―⑧円蔵寺―⑨神明宮―⑩第六天神社

私は杖をついての歩きで遅れがちになるため、市内で行う場合の案内は、昨年から自転車先回りをしています。今回も集合時間を過ぎると直ぐ、先に自転車を出発し、本村のバス停付近で皆さんを待ちました。ほぼ待つ間もなく合流できました。梅雨入り前で天候にも恵まれましたがその分暑さが少し気になる天気でした。また見学地での説明も分担方式とし、一部を加藤幹雄会員にお願いし、平野会員との三人体制を組みました。

① 海前寺 本村四―二―三―四

国道一号の本村交差点を少し東に進み次の信号「市立病院入口」を左に入るとすぐ左に海前寺があります。曹洞宗、東松山と号します。

天正十九年(一五九二)に草創、開山は藤沢市大庭の宗賢院の第四世令室長庵(慶長五年・一六〇〇没)です。現本堂は昭和十七年(一九四二)の新築、山門が三十一年、鐘楼は五十五年にできました。

山門前の旧増上寺の石燈籠を見学し山門をくぐると先ず本堂に参拝します。左右に同類の大きな石燈籠があります。

山門を入った左側に震災追善の碑があります。関東大震災の時(一九三三)、純水館茅ヶ崎製糸所の従業員の中でただ一人犠牲となった人の追善の碑です。純水館茅ヶ崎製糸所が建てたものです。墓地には戦後のボクシング界でピストン堀口の名で知られた堀口恒夫(大正三年・一九一四―昭和二十五年・一九五〇)の「拳闘こそわが命」と刻まれた墓があります。墓碑の右には作家井上靖の撰文による、彼の足跡を讃える小碑が昭和二十七年(一九六二)に建てられています。

山門前の道に戻ると墓地の西端に義人佐々木卯之助の供養塔があります。高さが四〇センチほどの卵形の自然石で、「明治九年(一八七六)／佐「々」木卯之助／十〇月「」」と没年が彫ってあります。これは卯之助が流された青ヶ島からもたらされたものです。『茅ヶ崎の石仏』² 八四頁

また、供養塔の西隣にはくるま地蔵があります。山門前の道は鎌倉道の一つであろうと言われています。『ふるさと』の歴史散歩



『茅ヶ崎の記念碑』

次に、本村からの坂道を北に下り最初の信号を左折し、計画通路に入ると直ぐに次の居村遺跡があります。

② 居村遺跡

本村四丁目(加藤さんが分かりやすく説明されました。)

昭和六十三年(一九八八)、都市計画道路の東海岸寒川線の埋蔵文化財発掘調査で、海前寺北西側の水田部分に当たる**居村B遺跡**

から、奈良・平安時代の多くの遺物とともに木簡が出土しました。その一つ、二号木簡から、「放生会(ほうじょうえ)」という仏教行事に関する文字が解読されました。木簡の出土は大変珍しく、近くに公の施設があったのではないかと考えられています。その後、放生木簡出土地点のすぐ近くで「茜槽(あかねおけ)」の文字がある三号木簡も出土し、

染色や古代の税(租庸調の調)についてと思われる文字群が墨書されていました。また、平成二十四年(二〇二二)には「貞観」と記した、古代の儀式に伴う食料品の配給帳簿とみられる木簡(四号木簡)他二

点が出土しました。その中には当時の地名や人名も記されており、茅ヶ崎の古代社会の一面が具体的に伝わってくるとともに、この遺跡に古代の役所が存在した可能性をより強くしました。現在、発掘の跡は道路となっています。『ぶらり散歩郷土再発見』

③ 観音堂

本村五一六―五三(加藤さんが丁寧に説明されました。)

計画道路上の居村遺跡からすぐ北の道を左に少し進みますと右折の袋小路があります。その奥に観音堂があります。くすんだ赤い屋根の上に同様の赤い宝珠を載せた古いお堂です。現在は十間坂一丁目にある円蔵寺の旧地で、大正十二年(一九二三)の関東大震災で寺が倒壊し、現在地に移るとき観音堂だけが残されたものです。

お堂に向かって左前には相模国準四国八十八箇所第七番茅ヶ崎村観音堂と書かれた立て札と弘法大師の坐像が納められた小さな祠があります。今回参加していた石黒会員は「同級生がいる」と言っておりました。

④ 本村の八王子神社

本村四一三―四〇(平野会長が丁寧に説明されました。)

観音堂から袋小路を出て少し東に戻り右折南進します。計画道路を越えて坂を上りますと右側に八王子神社があります。南側にある正面に廻って階段を登り先ず本殿に参拝します。

茅ヶ崎村の鎮守です。茅ヶ崎村は『新編相模国風土記稿』に、戸数四八六とみえていて、「外の村々に比べて規模が大きく村的要素を持つ集落構成があつて、それぞれに鎮守を持つようになった」(『ふるさと歴史散歩』)と言われ、茅ヶ崎村にはこの外に六



八王子神社の向拝(ごはい)彫刻
スサノオのオコチ退治

社があります。

祭神の「八王子」とは「古事記」に出てくる、アマテラスオオミカミとスサノオノミコトが天の安の川をはさんで「宇気比(うけい)占(う)い)をしたときに生み出された五男三女の神(アメノオシオノミコト・アメノホヒノミコト・アマツヒコネノミコト・イクツヒコネノミコト・クマノクスヒノミコト・タキリヒメノミコト・イチキシマヒメノミコト・タギツヒメノミコト)を指しています。平野さんが『古事記』にある「宇気比」の場面を朗読しました。

向拝(こうはい)社殿への入口)にある彫刻は見事なもので、須佐之男命が奇稲田姫を助けるために八岐大蛇を退治する場面です。

す。しかし祭神が八王子となったのは明治初年の神仏分離令後のことで、その前は神社名を八王子権現社といい、祭神も違っていました。(神武天皇の贖望(せんぼう))

境内の鐘楼の下には一七世紀に建立の庚申塔が三基(市内の庚申塔の中では古塔)と、廻国塔、サイノカミ(道祖神塔)がそれぞれ一基あります。寛文四年(二六六四)銘の庚申塔に「高座郡大場荘(大庭荘)茅ヶ崎村」とあるのは興味深い。」と『ふるさと』の歴

史散歩』に書かれています。

⑤ 一里塚 元町六丁目

八王子神社前の横道をホームセンター「島忠」方面に進み、少し手前の墓のところを左折南進し東海道に出ます。先に行った平野さんの一団から遅れたため、進路を右に取り相模線の線路沿いの狭い上り坂の道を進むと、私が自転車を押しているのを見かねたのか前原さんが後ろを押してくれてようやく坂上のシヨッピングセンター「そよら」の東側に出ました。

一里塚に着くと、説明板に書かれているように徳川家康が秀忠に命じ慶長九年(一六〇四)、日本橋を起点に一里ごとに塚を街道の左右に設けたこと等を話します。

塚に立っている石柱に「史跡 一里塚」「昭和三十六年(一九六二)一月/建設茅ヶ崎市/企画 郷土会」とあります。当時は郷土会の勢いが盛んで、他にもいくつかの石柱碑などを立てています。(茅ヶ崎の記念碑)

⑥ 旧寛永寺の石燈籠(市役所前の広場) 茅ヶ崎一(平野会長と加藤さんが説明しました。)

江戸時代に、諸国の大名が徳川將軍歴代の墓前に寄贈した寛永寺の石燈籠です。現在市内に三箇所あるうちの二箇所です。燈籠前には市教育委員会とちがさき丸ごとふるさと発見博物館による解説板が掲示されています。そこには「旧寛永寺の石燈籠 四基 / 昭和四十九年一月二十三日茅ヶ崎市指定重要文化財 (大八木信昭・信義氏寄贈(以下略))とあります。他の場所とは小和田公民館と上正寺で、合わせて六基ありますが、指定文化財になつ

たときは一〇基ありました。『茅ヶ崎の石仏』②

⑦ 純水館茅ヶ崎製糸所の説明板 新栄町二二 (加藤さんが詳しく

説明されました。)

純水館茅ヶ崎製糸所は、現在ヤマダ電機のある所から、東は一里塚通りまで、西は茅ヶ崎郵便局のあたりまでにありました。純水館は小山房全により大正六年(一九一七)に創業されています。令和四年十二月に茅ヶ崎市教育委員会とちがさき丸ごとふるさと発見博物館が立てた説明板の解説には、製糸所の操業は大正六年(昭和十二年(一九三七))で、敷地約一万二千坪、約三百五十名が働く大工場と書かれています。また、茅ヶ崎に開業した理由や「糸も作るが、人間もつくる」と評された小山房全の経営観など、従業員のほかに一般市民にも解放された運動会、慰安会など地域の文化面にも大きな影響を与えたことが書かれています。続いて茅ヶ崎警察署跡の西側にある円蔵寺に向かいます。

⑧ 円蔵寺 十間坂二―三―三九

文安二年(一四四五)に没した善管が中興の祖であると伝えられています。元は本村五丁目にありましたが、大正十一年(一九二二)の関東大震災で倒壊し、昭和四年(一九二九)に現在地に移りました。旧地には先に見学した③観音堂があります。

ここでは会員で檀家の尾高さんから住職にお願いして説明を頂く予定でしたが、土曜日であいにく法事が入ったため予定変更となりました。事前にもらっていた御本尊の写真を皆さんに披露すると、尾高さんから「本尊は何様だ?」と聞かれたのですが、説明文ばかりに気が行っていて思い出しません。「マズい、むにや

むにや」と、そんな訳がないと思いつながら「地藏菩薩カナ」と言いますと、「そんなわけないだろう!」「仏像を見て何様か分からないのか」と怒られました。「わかるのもあればわからないものもあります」などと言いつつ思わず写真を見ますと小さく薬師如来と書いています。そこで「本尊は薬師如来です。左手の上に薬壺が載っています、そこを見れば分かります」と写真を回しました。ただ、手元に戻ってきた写真をよく見ますと三尊仏になっています。またまた話し忘れましたが、薬師三尊と言えば脇侍は向かって左が日光、右が月光菩薩です。神奈川県では日向山宝城坊(日向薬師)の本尊が国指定重要文化財で有名です。横浜の県立歴史博物館にはその模刻像があります。

また境内の乃木希典像とその横の「護国忠魂碑」について「敗戦後、撤去指令が出たためここに移された」と話したのですが、尾高さんは指令ではなく自主的に移したのだ、と怒っています。

『ぶらり散歩郷土再発見』『茅ヶ崎の記念碑』

以上で次に向かいます。

⑨ 神明宮 十間坂三―九―三九 (平野会長が面白おかしく説明しました。)

十間坂の信号を旧の市立体育館の方に向かって最初の道を左折し神明宮に向かいます。

境内に二基の庚申塔があり、向かって左の塔は二匹の猿を従えた四本腕の青面金剛像を刻んであります。明暦四年(一六五八)銘の古塔です。昭和六十一年(一九八六)に市重要文化財に指定され、平成十八年(二〇〇六)二月十四日に、神奈川県の有形民俗文化財に指定されています。



2 三〇頁
 続いて神社裏から第六天神社に向かいます。

⑩ 第六天神社 十間坂三十一七一一八(ここでも平野会長が面白おかしく説明しました。)

祭神は天神七代のうち第六代目に当たるオモダルとアヤカシコネの神となっています。『古事記』では兄を淤母陀琉、妹を阿夜訶志古泥と、『日本書紀』では兄を面足尊、妹を綾惶根尊と表記している。各地に祭られる第六天神社の祭神がこの二人の神となったのは、明治初年の神仏分離のときからです。神仏分離以前はどうだったかというところ。仏教では、ヒトは欲望から逃れられなくて「欲界(よくかい)」という世界に住んでいるとされています。その欲界は、さらに六層の世界からできていて、その最上階の世界を「他

銘文は彫りが浅く殆ど読めません。造立年が近い同様の塔が市内に三、平塚市に二、寒川町に一、藤沢市に一基あり、共に県の文化財指定を受けています。「湘南の七庚申といひましてお正月に一巡しておくと、一年間難を逃れるといわれていきます」と平野さんが言いましたら「ホントですか」と聞かれて「冗談です」とごまかしていました。『ぶらり散歩郷土再発見』・『茅ヶ崎の石仏』

化自在天(たけじぎいてん)「またの名を第六天」というのだそうです。この第六天は「第六天魔王波旬(だいろくてんまおうはじゅん)」が支配しています。ということで、分離以前の祭神はこの第六天魔王波旬が祭神だったと思われる。神仏習合の魔神だったので、明治政府につぶされたと考えられます。

この神社の二つ目の見所は社殿の向拝の彫刻です。武装した男性が手をかざして遠くを眺めている図です。これは神武天皇が東征の途中、熊野で苦戦しているとき「ヤタノカラスの案内によって進め」と託宣がくだり、目的を達した天皇が(そのときはまだ天皇ではなかったのですが)宇陀(現 奈良県宇陀市)の国見ヶ丘で遠方を眺めている様子です。向拝の破風には、舞い降りるヤタノカラスの彫刻もあります。彫刻したのは、関東大震災でつぶれた社殿の再建時に市内の神社で鑿(のみ)をふるった佐藤光重という彫刻師です。④で立ち寄ったスサノオのオロチ退治も佐藤光重の作品です。(神武天皇の瞻望)

拝殿の左右前後して慰霊碑と歌碑が建っています。慰霊碑の碑銘は靖国神社権宮司の書、碑陰に日露戦争以降の戦没者七十八名を刻んでいます。建立は氏子・崇敬者としていますが、十間坂の自治会が主体でしょう。(茅ヶ崎の記念碑)

以上で本日の巡りは無事に終了しました。配布した資料には、⑪金剛院から⑬御霊神社まで載せておきました。次回にめぐる予定です。

終了後、平野会長以下有志により駅近くの某店で楽しい反省会を行いました。

【参考資料及び引用文献】

- ・ 日本古典文学大系『古事記 祝詞』岩波書店
- ・ 資料館叢書10 『茅ヶ崎の記念碑』塩原富雄著 平成三年三月茅ヶ崎市文化資料館刊
- ・ 『ふるさとの歴史散歩』塩原富雄著 昭和五十八年六月二十八日 茅ヶ崎郷土会刊
- ・ 『ぶらり散歩郷土再発見』初版塩原富雄著 平成三十年三月改訂版 茅ヶ崎市教育委員会刊
- ・ 「神武天皇の瞻望(せんぼう)」平野文明 『郷土ちがさき』一四〇号所収 平成二十九年(二〇一七)九月茅ヶ崎郷土会刊
- ・ 「本村八王子神社の彫刻 剣を持つ男の正体」平野文明 石仏調査ニュース 『茅ヶ崎の石仏』14号所収 平成二十二年(二〇一〇)九月 茅ヶ崎市文化資料館刊
- ・ 資料館叢書14 『茅ヶ崎の石仏』2茅ヶ崎地区 平成三十年文化資料館刊
- ・ 文化資料館叢書3 『茅ヶ崎の庚申塔』昭和五十二年 文化資料館刊

(令和六年八月六日記)

「茅ヶ崎市内の東海道を歩くその②」

参加の記

この度、伝統ある茅ヶ崎郷土会に入会し、初めて史跡・文化財をめぐる会に参加できました。講師の丁寧な説明に新たな知見が得られ、また、探訪先の近道まで道路事情に精通しているのには驚きでした。

海前寺 (曹洞宗)

齋藤和夫

最初の目的地。

徳川幕府の鉄砲役人で演習場の利用をめぐる地元農民の生活を助けたため島流しに処せられたという義人佐々木卯之助の供養碑がありました。卯之助の碑は市内の他にもあるようです。↓東海



佐々木卯之助

佐々木卯之助供養碑

岸北五―一六にあります。主碑は明治三十一年建立、発起者は村長伊藤里之助、副碑は昭和五十六年建立、卯之助の略歴などが記されています(平野)。

本村居村遺跡



旧寛永寺石燈籠

円蔵寺 (真言宗)
相模国準四国霊場の七六番

今は何も残っていませんが茅ヶ崎の誇りと言っても良いでしょう。

純水館茅ヶ崎製糸場跡の説明板
「糸も作るが人も作る」。製糸所として、良質の生糸を海外にも輸出していたそうです。また、当時としては珍しい人間味のある経営感覚で運営していたようです。

由緒ある大きな江戸時代の石造物が、市の中心部にあるのは新たな発見です。

古代遺跡の発掘現場を見られたのは貴重な体験でした。
観音堂跡
茅ヶ崎にも巡礼の札所があることは初めて知りました。
本村の八王子神社
境内は広く、他にも社(やしろ)や鐘楼、庚申塔があり、拝殿の上面には須佐之男命の八岐大蛇(やまたのおろち)退治の彫刻がありました。
一里塚
江戸をたつて東海道旅程一里毎の塚です。他に、茅ヶ崎にはここから東の方の菱沼というところに、紀州藩が東海道の七里毎に設けていた飛脚の中継地も置かれていたそうです。
市役所前の石燈籠



第六天神社の向拝(ごはい)彫刻
国見する神武天皇

本企画をされた会員の皆様には大変お

初めでの参加でしたが、神代、古代、江戸から近代に至るまでの歴史上の事物の一端に触れることにより、改めて茅ヶ崎の悠久の歴史を感じた次第です。

おわりに
長年茅ヶ崎に住んでいながら地域の感覚に疎く、今回、ご縁により郷土会に入会させて頂きました。

弘法大師石像を拝観しました。
十間坂の神明宮
平安時代の大庭御厨につながるかも知れない神社とのことでした。また、同型のものが、茅ヶ崎・藤沢・寒川・平塚に七基ある、江戸時代初期の庚申塔がありました。
十間坂の第六天神社
史跡めぐりの最後。拝殿の上面には神武天皇東征の場面の彫刻と、神武天皇の熊野から吉野への行軍を道案内した八咫鳥(やたがらす)の彫刻がありました。

世話になり、ありがとうございました。

その他の事業報告

令和六年度 茅ヶ崎郷土会総会

日時 7月24日(水) 13時30分～

於 市民文化会館第4会議室

佐藤 光茅ヶ崎市長 岸 正明市議会議長 竹内 清市教育長 大竹 功文化スポーツ部長 菊池 修文化推進課長 松岡智紀教育推進部長 伊勢田珠代社会教育課長のご来賓をお迎えして無事に終了しました。

茅ヶ崎郷土会新役員

会長 平野文明 副会長 尾高忠昭 事務局 長 熊澤克躬 会計 山本俊雄 理事 森 早苗 同 加藤幹雄 同 羽切信夫 監事 平井恵美子 相談役 杉山全

令和7年3月までの事業予定

新事業 待ちに待たれた『茅ヶ崎市史』四巻―通史編の輪読会

準備会 8月20日(火) 13:30～於 市立図書館第2会議室

第1回 9月3日(火) 13:30～於 市立図書館第2会議室

第2回 10月3日(火) 13:30～於 市立図書館第2会議室

(11月は休会 その後は原則第1火曜日 於 図書館第2会議室を予定)

史跡・文化財めぐり

310回 小田原市の石垣山城址を訪ねる

10月19日(土)

311回 市内の東海道を歩く③

12月14日(土)

312回 市外探訪 場所検討中

令和7年3月15日(土)

史跡・文化財めぐりの事前勉強会と郷土会講座

9月10日(火)・石垣山城址 ・講座「姥島の話」(平野会員)

会場 市民文化会館第1会議室

11月19日(火)・東海道を歩く③・講座(テーマ未定) 石黒会員

会場 市役所コミュニティホール

1月21日(火)・講演会 or 講座―内容と講師検討中

会場 図書館第1会議室を予定

2月18日(火)・市外探訪(場所未定)・講座(テーマ未定) 加藤会員

会場 図書館第1会議室を予定

市民文化祭(茅ヶ崎みんなのアートフェス2024参加事業)

写真展 10月26日(土)～27日(日) 市民会館展示室A

下寺尾遺跡文化祭 10月27日(日)

下寺尾遺跡群の保存活用推進のイベント。小出地区まちぢから協議会と下寺尾遺跡部会の主催。昨年度は火起こしや勾玉・土器作り、下寺尾遺跡ガイドなどが行われました。

【編集後記】

たくさんの方の原稿をお寄せ頂きました。お礼を申し上げます。長編もいくつかあつて私が編集担当した中で、最もページ数の多い会報となりました。事情があつて郷土会のイベントには出向けないという会員も多いので、皆さんと会をつなぐ貴重な手段となるよう、微力ですが汗をかきながら編集しています。

会員みんなの会報です。ドンドン投稿してください。(編集子)

2024年度茅ヶ崎郷土会事業及び丸ごとの会との共催事業(網線は終了したもの、中止・日時等の変更もあります。) 最新8月20日作成

日取り	理事会	郷土会総会 及び催し物	史跡・文化財めぐり	史跡文化財めぐりの事前勉強会 【原則図書館 第3火第1会議室】	会場	茅ヶ崎市中輪議会 原則各月第1火 時間変更あり 【原則図書館 第2会議室】	会場 図書館	郷土ちがさき 発行
2024年 (令和6年)	4月 11日 サボテン	第69回大面越前祭 大面越前守 忠相公遺跡写真展 於 茅ヶ崎市民文化会館展示室B C	—	—	—	—	—	—
	5月 11日 サボテン	21日(火)10:00~12:00 郷土芸能保存協会 理事会 於 市民文化会館第4会議室	—	—	—	—	—	—
	6月 13日 サボテン	8日(第2土)8:50願改札前集合 309回 市内の東海道を歩く② 本村~十間 坂地区	—	—	—	4日(第1火)13:30~16時(準備会)	第2会議室	1日発行 (160号)
	7月 1と18日 サボテン	郷土会令和6年度総会 24日(水)13:30~ 市民文化会館4階大会議室 (時間を運んで郷土芸能保存協会の総会も行 われる)	—	—	—	2日(第1火)13:30~16時(準備会)	第2会議室	—
	8月 19日 サボテン	—	—	—	—	20日(第3火)13:30~16時(準備会)	第2会議室	—
	9月 12日 サボテン	—	—	10日(第2火)13:30~16:00 ●事前勉強 小田原市の石垣山城址 ●講座 焼島の話 平野会員	文化会館 第1会議室 (36人)	3日(第1火)13:30~16時(第1回)	第2会議室	1日発行 (161号)
10月 未定	第68回茅ヶ崎市民文化祭に写真展で参加 於 市民文化会館展示室A	19日(第2土) 集合時間・場所検討中 310回 小田原市の石垣山城址を訪ねる 説明 郷土会々々員	—	—	—	1日(第1火)10:00~12時(第2回)	—	—
11月 未定	24日(日)9時開場・13開演 第52回茅ヶ崎郷土芸能大会 於 市民文化会館小ホール	—	19日(第3火)13:30~16:00 ●事前勉強 市内の東海道を歩く③ ●講座(内容未定)石黒 進	コミュニティホール Aor.B (市役 所)	—	図書館休館のため中止	—	—
12月 未定	—	14日(第2土) 集合時間・場所検討中 311回 市内の東海道を歩く③ 説明 郷土会々々員	—	—	—	3日(第1火)13:30~16時(第3回)	予定	—
2025年 (令和7年)	1月 未定	—	21日(第3火)13:30~16時 講演会(内容未定) 講師(未定)	21日(第3火)13:30~16時 講演会(内容未定) 講師(未定)	予定 図書館 第1会議室	7日(第1火)13:30~16時(第4回)	予定	1日発行 (162号)
	2月 未定	—	18日(第3火)13:30~16:00 ●事前勉強 市外探訪(場所未定) ●講座(テーマ未定)加藤幹雄会員	18日(第3火)13:30~16:00 ●事前勉強 市外探訪(場所未定) ●講座(テーマ未定)加藤幹雄会員	予定 図書館 第1会議室	4日(第1火)13:30~16時(第5回)	予定	—
	3月 未定	—	15日(第3土) 集合時間・場所検討中 312回 市外探訪(場所未定) 説明 郷土会々々員	—	—	4日(第1火)13:30~16時(第6回)	予定	—

★実施日・場所・テーマなどは変わる場合があります。お問い合わせは 山本俊雄(090-6174-2806) 尾高忠昭(090-3241-0775) 平野文明(090-8173-8845) 加藤幹雄(090-5313-3755)
 ★「田跡・文化財めぐり」 集合場所・時間などは別に発表します。
 ★資料代等として会員200円、(募集する場合、会員外は300円)をご負担願います。また必要経費が生じた場合は会員・会員外を問わず臨時徴収することがあります。
 ★史跡めぐり・勉強会・茅ヶ崎市民文化祭など「ちがさき丸ごと」がさき丸ごとふらふらと発掘博物館の会との共催です。
 ★交通費、食事、後援等は各自対応してください。
 ★10月実施の写真展(茅ヶ崎文化団体協議会主催第64回市民文化祭)は、「(公財)茅ヶ崎スポーツ振興財団主催・茅ヶ崎市民の茅ヶ崎みんのアトリエ2024」参加事業です。